茨城県笠間市

長峰東遺跡

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2010

笠間市教育委員会
(有)毛野考古学研究所

茨城県笠間市

長峰東遺跡

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2010

笠間市教育委員会
(有)毛野考古学研究所

序

笠間市は，茨城県のほぼ中央に位置し，北西部には八溝山系が，南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり，中央を北西部から東部にかけて涸沼川が台地を潤す自然豊かな地域です。また，河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから，原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畑地帯総合整備事業に関わる発掘調査であります。この調査の結果，弥生時代～古墳時代前期の遺跡が確認され，地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。

この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成22年3月

笠間市教育委員会
教育長　飯　島　　勇

例　　言

1．本書は、茨城県笠間市小原地区に所在する長峰束遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査による記録保存を目的として実施された。
3．調査及び報告書作成は、笠間市教育委員会の指導・委託を受けて、(有) 毛野考古学研究所が実施した。
4．遺跡の所在地、調査期間、調査面積は以下の通りである。
　所在地　　笠間市小原字長峰 77 番地外
　調査面積　1,671㎡
　調査期間　平成 20 年 8 月 18 日～平成 20 年 11 月 9 日
　整理期間　平成 21 年 10 月 10 日～平成 22 年 3 月 15 日
5．調査・整理担当者は以下の通りである。
　高橋清文　土生朗治　((有) 毛野考古学研究所)
6．調査で得られた資料は笠間市教育委員会で保管している。
7．調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝を申し上げます。
　能島清光　川崎純徳　斎藤弘道　海老沢稔　鈴木素行　飯島一生　枝川永男　スカイ・サーベイ
　芳野工業 (株)
8．本書の作成にあたっては、出土遺物の実測図の監修で松田政志、作業全般で賀来孝代、実測図作成・トレース・図版作成で三沢京子、小出陽子、鬼山由子、神宮明美、仙波菜津美、高橋真弓、根本正子の協力を得た
9．発掘調査参加者は以下の通りである。
　青木馨、青木誠、飯田博美、飯田昭、海老原龍生、大山年昭、大内英雄、大平昭夫、小坂部克己、
　小堤静江、小野瀬晃、川又誠二、川上孝子、小柴富光、佐久間順美、佐藤としえ、佐藤利男、塩畑勝利、
　白澤清三、菅谷正義、菅谷和子、鈴木とし江、関律子、仙波由美子、高橋真弓、高田幸江、豊島英則、
　仲田仙、中村伊重、中島とみ子、中島秀雄、中村薫、野村正子、吹野昇、福島えり子、三河博志、武藤瑞良、
　山口致展

凡　　例

1．本書で使用した地図は、国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図、笠間市発行 2 千 5 百分の 1 都市計画図である。
2．出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。
　ＳＩ・・竪穴住居跡　ＳＫ・・土坑　ＳＤ・・溝　Ｐ・・ピット
3．実測図で使用した縮尺は以下の通りである。
　竪穴住居跡・・1／60　土坑・・1／60　溝・・　1/60、1／100
4．土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著　(財) 日本色彩研究所) を使用した。
5．遺構一覧表・遺物観察表の表記は (　) 内数値が計測推定値を、[　] 内数値は残存値を表す。
6．遺構図中のスクリーントーンは炉の焼土の範囲を示す。

目　　次

序
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第1節　地理的環境 …… 2
　第2節　歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　調査の方法と基本層序
　第1節　調査の方法 …… 4
　第2節　基本層序 …… 4
第Ⅳ章　遺構と遺物
　第1節　竪穴住居跡 …… 6
　第2節　土坑その他 …… 49
　第3節　溝 …… 51
　第4節　ピット …… 55
　第5節　谷部包含層その他 …… 55
第Ⅴ章　総括 …… 59

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図……　2
第2図　調査地区の位置図……　3
第3図　基本土層図……　4
第4図　遺構全体図……　5
第5図　1号住居跡……　6
第6図　1号住居跡出土遺物……　7
第7図　2号住居跡……　9
第8図　2号住居跡出土遺物……　10
第9図　3号住居跡……　11
第10図　3号住居跡掘り方……　12
第11図　3号住居跡出土遺物……　13
第12図　4号住居跡……　14
第13図　4号住居跡掘り方……　15
第14図　4号住居跡出土遺物……　16
第15図　5号住居跡……　18
第16図　5号住居跡掘り方……　19
第17図　5号住居跡出土遺物1……　20
第18図　5号住居跡出土遺物2……　21
第19図　6A・6B号住居跡……　23
第20図　6A号住居跡出土遺物……　24
第21図　7号住居跡・出土遺物……　25
第22図　7号住居跡出土遺物……　26
第23図　7号住居跡掘り方……　28
第24図　8号住居跡・出土遺物……　29
第25図　9号住居跡……　31
第26図　9号住居跡出土遺物1……　32
第27図　9号住居跡出土遺物2……　33
第28図　10号住居跡・出土遺物……　36
第29図　11号住居跡出土遺物……　37
第30図　11号住居跡・掘り方……　38
第31図　12号住居跡……　40
第32図　12号住居跡出土遺物1……　41
第33図　12号住居跡出土遺物2……　42
第34図　13号住居跡・出土遺物……　44
第35図　14号住居跡・出土遺物……　45
第36図　15号住居跡・出土遺物……　46
第37図　16号住居跡・出土遺物……　48
第38図　1～4号土坑……　49
第39図　6号土坑出土遺物……　50
第40図　1号陥し穴……　50
第41図　1号井戸……　51
第42図　1号溝・2号溝出土遺物……　52
第43図　2・3・4号溝……　53
第44図　5・6号溝……　54
第45図　47号ピット出土遺物……　55
第46図　遺構外出土遺物（縄文時代）……　57
第47図　遺構外出土遺物（古墳時代～近世）……　57
第48図　長峰東遺跡の弥生時代と古墳時代の住居の比較……　60

表目次

表1　1号住居跡出土遺物観察表……　8
表2　2号住居跡出土遺物観察表……　10
表3　3号住居跡出土遺物観察表……　12
表4　4号住居跡出土遺物観察表……　17
表5　5号住居跡出土遺物観察表……　19
表6　6A号住居跡出土遺物観察表……　23
表7　7号住居跡出土遺物観察表……　27
表8　8号住居跡出土遺物観察表……　30
表9　9号住居跡出土遺物観察表……　30
表10　10号住居跡出土遺物観察表……　35
表11　11号住居跡出土遺物観察表……　39
表12　12号住居跡出土遺物観察表……　43
表13　13号住居跡出土遺物観察表……　45
表14　14号住居跡出土遺物観察表……　46

表15　15号住居跡出土遺物観察表……47
表16　16号住居跡出土遺物観察表……47
表17　6号土坑出土遺物観察表……49
表18　土坑一覧表……51
表19　2号溝跡出土遺物観察表……55
表20　47号ピット出土遺物観察表……55
表21　ピット一覧表……56
表22　遺構外出土遺物観察……58

写真図版目次

PL.1　調査区全体写真
PL.2　堀没谷、1・2・3号住居跡
PL.3　4・5・6号住居跡
PL.4　7・8・9号住居跡
PL.5　9・10・11号住居跡
PL.6　12・13・14号住居跡
PL.7　14・15・16号住居跡、1・2号土坑
PL.8　3・4・6号土坑、1号井戸、1・4・5号溝、1号隔し穴
PL.9　1～3号住居跡出土遺物
PL.10　3～5号住居跡出土遺物
PL.11　5号住居跡出土遺物
PL.12　5～9号住居跡出土遺物
PL.13　9～12号住居跡出土遺物
PL.14　12～14号住居跡出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過

第1節　調査に至る経緯

畑地帯総合整備事業は、農業に伴う道路・潅漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、反収の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また、農業生産基盤の整備の一環として、旧友部町時代の平成13年に小原地区土地改良組合が設立され、県の指導の下、効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成15年1月に三本松遺跡の発掘調査、翌年1月に小原遺跡の発掘調査、さらに平成20年に塙谷遺跡（一部）の発掘調査が行われ、多大な成果が得られている。

今回の整備事業計画地は長峰東遺跡の範囲内であることから、友部町教育委員会（現笠間市教育委員会）は平成19年に笠間市文化財審議委員の能島清光氏に試掘確認の調査を依頼した。その結果トレンチから3軒の住居跡が確認され、出土遺物などから弥生時代を主体とした集落があることが推定された。

工事主体者である水戸土地改良事務所（現県央農林事務所）は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成19年7月10日付けで遺跡について文化財保護法94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成19年11月2日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は毛野考古学研究所に調査を依頼した。承諾後、笠間市教育委員会・水戸土地改良事務所・毛野考古学研究所は三者協議を行い、試掘調査の結果に基き、平成20年7月18日付けで文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届け出を茨城県教育委員会へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏と笠間市文化財保護審議委員の能島清光氏を指導委員として平成20年8月18日より発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査の経過

平成20年8月18日～20日、重機による表土除去作業を行う。20日から作業員による遺構確認作業を開始し、住居跡1数軒を確認する。27日からは、竪穴住居跡の掘り込み作業を開始する。9月上旬には竪穴住居跡の調査を進めるとともに溝跡の掘り込みも開始する。9月末には、住居跡の調査が12号住居跡まで進む。10月上旬には住居跡の調査がほぼ終了し埋没谷、土坑、ピットの調査を行う。11日には、調査がほぼ終了し、隣接する塙谷遺跡の調査に移行する。16日からは空中写真撮影のために再び調査区内の清掃作業を行い、18日に空中写真撮影を行う。20日から竪穴住居跡の床下掘り方調査を開始し、11月5日には掘り方調査を終了する。6日から8日にかけて図面作成のための測量作業を行い、現地調査のすべてを終了する。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

笠間市小原地区は、水戸市西部から笠間市域の北部にかけて広がる丘陵地帯の南東端部にある。長峰東遺跡は、小原地区の東部にあり、丘陵裾部から平野部に移行する台地の緩斜面に立地している。遺跡の南方約１kmには涸沼前川が西北西方向から東南東方向に流れており、沖積世低地を形成している。涸沼前川は、下流約10km地点で涸沼に注いでおり、さらに涸沼川を通じて、太平洋とも繋がっている。長峰東遺跡から北西側は、傾斜面が続き標高100ｍ前後の丘陵尾根部に至る。現在も国道50号が通じ、地形的に東西の交通ルートの結節点となっている。長峰東遺跡は農耕生産に適した豊かな水の恵みと、山野の天然資源、交通ルート上の結節点という立地環境にあると言える。

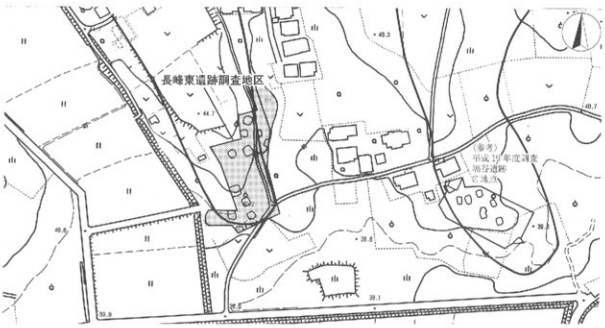
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1：25,000）

1．長峰東遺跡　2．塙谷遺跡　3．壱平塚古墳　4．高寺古墳群　5．小原遺跡　6．一本松古墳群　7．塚端古墳
8．行者遺跡　9．三本松遺跡　10．原坪古墳群　11．原古墳　12．大日山古墳群　13．和高塚古墳　14．御沢古墳群
15．二軒屋塚群　16．三軒屋古墳群　17．杉崎遺跡　18．沢山遺跡　19．宮前遺跡　20．三湯遺跡　21．舞台遺跡
22．舞台西遺跡　23．向山遺跡　24．新道池北遺跡　25．新道池南遺跡　26．遣中前遺跡　27．中の内遺跡　28．大塚古墳群
29．六部塚　30．小林遺跡　31．竜岡遺跡　32．西川遺跡　33．長峰西遺跡

第２節　歴史的環境

長峰東遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての遺跡である。弥生時代後期後半期の長峰東遺跡は、茨城県北部の久慈川・那珂川・涸沼川水系を中心として分布する、十王台式土器文化圏の南端に属している。十王台式土器は各水系ごとに特徴を持っており、長峰東遺跡の十王台式土器は茨城町に所在する大戸下郷・矢倉・大作遺跡等、涸沼川水系西部域の遺跡群の遺物と共通した特徴を持っている。長峰東遺跡周辺には、同時期の集落が広く展開しており、すでに調査が行われ報告されている、塙谷遺跡平成19年度調査Ｃ地点では、10軒の竪穴住居跡が確認されている。ここでは、十王台式の直前段階の土器と最終段階の時期の土器が多量に出土している。さらにその北東側の平成20年度調査Ａ・Ｂ地点では50軒以上の弥生時代の竪穴住居跡の調査が行われている。Ａ・Ｂ地点全体では約100軒の竪穴住居跡が確認されており、弥生時代に次いで古墳時代前期が多く、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世に至る時代の遺構も確認されている。

長峰東遺跡の古墳時代前期の初頭頃は、住居跡や土器はまだ弥生的な伝統のもとにあり、古墳時代前期前葉頃、涸沼川上流域にも方形周溝墓を伴うような集落が出現してくる段階に至ると、長峰東遺跡でも住居跡や土器が古墳時代的な様相に変わってくる。周辺の古墳時代前期の遺跡では、涸沼川上流部の新善光寺遺跡や涸沼前川下流域の綱山遺跡等で方形周溝墓を伴う古墳時代前期の集落が見られる。また、涸沼川中流域の茨城町の南小割遺跡では、在地の土器とは異質で特徴的な土器を伴っていることなどから、入植者による移住集落ではないかと推測されている。南小割遺跡もまた、方形周溝墓を伴っており、遺跡付近には時期が下ると前方後方墳の宝塚古墳が造られている。



第２図　調査地区の位置図（1：2,500）

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序

第１節　調査の方法

調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として行われた。調査は、同時期に長峰東遺跡と塙谷遺跡の各地点について実施され、塙谷遺跡はＡ・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３地区の各名称が使用され、長峰東遺跡については、Ｄ地区という名称が使用されている。長峰東遺跡の遺構の測量は世界測地系第Ⅸ系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標で、調査範囲外の北西角のＸ軸 40990、Ｙ軸 44600 を起点として、南方向と東方向に 10m おきにグリットラインを設定し、交差したマス目に第４図の全体図にあるように A1 から K7 までグリッド名をふり遺構の位置を示した。

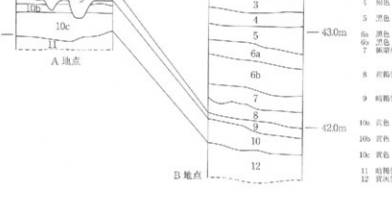
調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

遺構の記録は１／20 縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、１／10、１／20、１／40 縮尺を使用した。遺跡全測図は１／200 で作成した。

写真撮影は、白黒 35mm 判、リバーサル 35mm 判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に随時行った。

第２節　基本層序

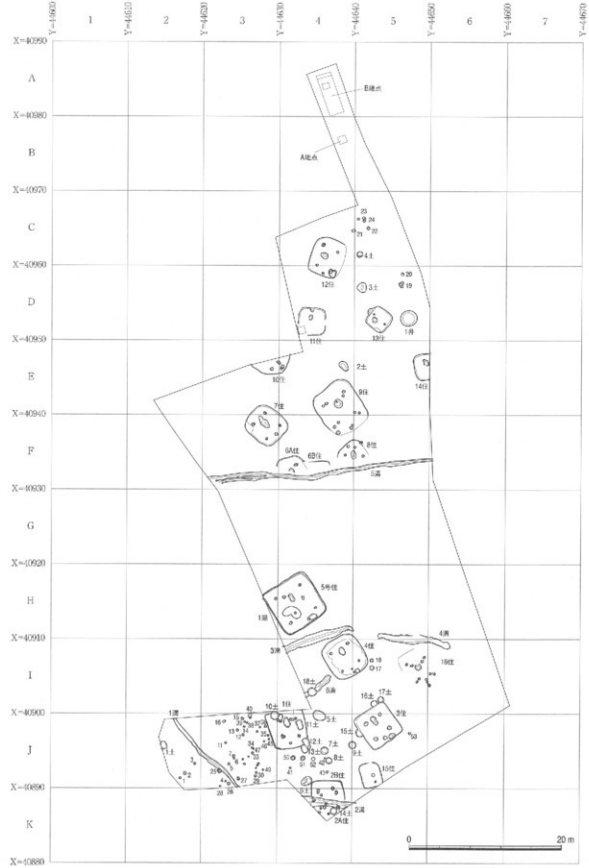
調査区の北部の標高 44m の台地上（Ａ地点）とその北東側に下る埋没谷地形部（Ｂ地点）について、さらに地形的には低い、５号住居跡と重複して確認された縄文時代の隘し穴の壁面で記録した。しかし、Ａ地点では上層において倒木による撹乱が激しく、表層から通した基本土層として図示できなかった。同時期に実施した塙谷遺跡の基本土層とあわせてはじめて層序について確定できたことから、ここでは谷部の埋没土層を中心に示し、遺跡の基本土層については塙谷遺跡の発掘調査報告書であらためて示すことにしたい。



基本土層

1a	黒褐色	ローム粒・炭化材微量、締まり非常に弱い、粘性なし。
1b	灰黄褐色	ローム粒多量、炭化粒少量、地土層最量、締まり弱く、粘性なし。
1c	暗灰黄褐色	ローム粒・炭化粒少量、黒土を使く、粘性なし。
2	褐灰色	ローム粒微量、締まり弱く、粘性なし。
3	黒色	締まりや堅く粘性なし。鉄集積化強期の土器片を含む。
4	褐色	下層に礫文時代前期の関山Ⅱ式の土器片を含む。締まり堅く、粘性あり。
5	黒色	褐色土がブロック状に混入する。4～5 層の漸移層。
6a	黒色	微細な黄色粒を微量含む。締まり中位く、粘性あり。
6b	黒色	微細な黄色粒を少量含む。締まり弱く、粘性あり。
7	極暗褐色	20～50cm 程のローム・ブロック・暗褐色土ブロックを多く含む。褐褐色黄色粒を少量、赤色粒を微量含む。締まり堅く、粘性あり。6～7 層の漸移層。
8	黄褐色	20～50cm 程の黒色土ブロックを多く含む。径 2mm の黄色粒を少量、赤色粒を微量含む。締まり弱く、粘性あり。
9	暗褐色	径 2mm の黄色粒を少量、微細な白色粒を微量含む。ソフトローム層。作業では、やや地盤土高なり下層の 10 層漸移層を含む。
10a	黄色	黄色粒主体、径 1mm 以下の白色粒・黒色粒を多く含み、白色の傾斜が多い。締まり弱く、粘性あり。
10b	黄色	黄色粒主体、径 1mm 以下の白色粒・黒色粒を多く含み、黒色粒の傾斜が多い。締まり弱く、粘性あり。
10c	黄色	黄色粒主体で粒質が大きい。径 1mm 以下の白色粒・黒色粒を多く含む。締まり堅く、粘性あり。
11	暗褐色	混入物微小となし。しまり弱く、粘性あり。
12	黄灰色	粘土層。径 1mm 程の黒色粒を微量含む。褐鉄器が筋状に入る。締まりが非常に強く、粘性あり。

第３図　基本土層図


Y=44600
Y=44610
Y=44620
Y=44630
Y=44640
Y=44650
Y=44660
Y=44670
1
2
3
4
5
6
7
X=40990
X=40980
X=40970
X=40960
X=40950
X=40940
X=40930
X=40920
X=40910
X=40900
X=40890
X=40880
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
B地点
A地点
0
20 m

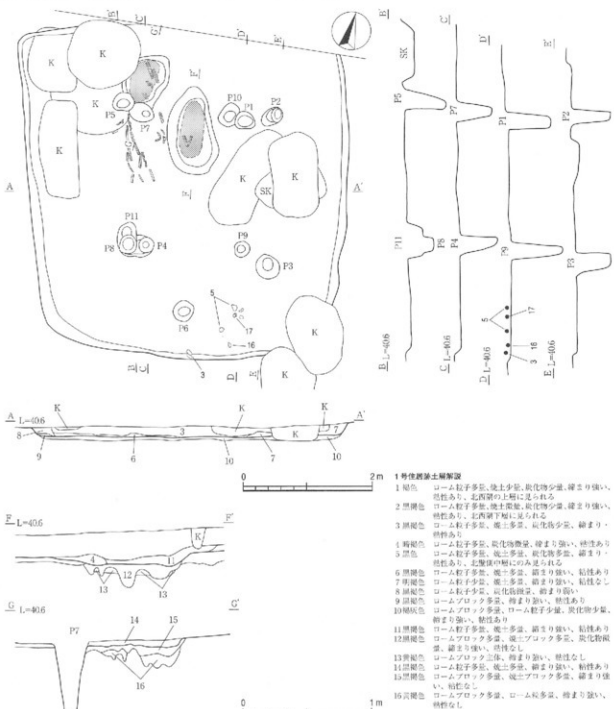
第４図　遺構全体図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

１号住居跡（第５・６図）

位置　調査区の南西部Ｊ４グリッドにある。　**規模と平面形**　南北方向5.1ｍ、東西方向4.8ｍ。北西の角



第５図　１号住居跡

第6図　1号住居跡出土遺物

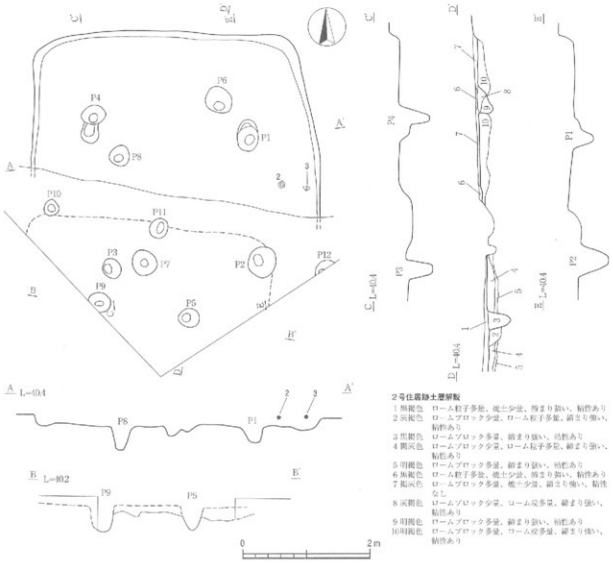
表1　1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	– – –	口唇部にキザミ、口縁部外面は付加条2種縄文を施文し2対の貼りこぶを貼り付ける。	白色粒	良好	にぶい黄褐色	
2	弥生土器 壺	– – –	縦区画後横区画を行い、区画内に波状文を下から上に向かって充填する。	石英、白色粒	良好	暗褐色	
3	弥生土器 壺	– – –	横区画の波状文を施文後縦区画を施す。区画内に上から下に向かって波状文を充填施文する。	海綿骨針、白色粒、赤褐色粒	良好	にぶい黄橙色	
4	弥生土器 壺	– – –	縦区画後区画内に波状文を上から下に向かって充填する。隆帯は区画の上下に2条あり、だれた指頭痕を残す。胴面は7本1単位。	白色粒多量	良好	明黄褐色	
5	弥生土器 壺	– – –	頸部隆帯は3条で指頭で押圧される。胴部縄文との境に弧状の掲描き文を施文し、縦区画後、波状文と格子目文を充填する。胴部は付加条1種で、RのS巻き、LのZ巻きを付加する。	金雲母	良好	黒褐色	
6	弥生土器 壺	– – –	横区画の波状文を施文後縦区画を施す。区画内に波状文を充填する。	海綿骨針、石英粒、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
7	弥生土器 壺	– – –	胴部縦区画内に格子目文を施す。	金雲母	良好	黒褐色	
8	弥生土器 壺	– – –	横区画の波状文を施文後縦区画を施す。胴部は付加条2種縄文の羽状構成。	白色粒、赤褐色粒	良好	灰黄褐色	
9	弥生土器 壺	– – –	RのS巻きとRのZ巻きを付加した付加条1種縄文で羽状構成。	石英、長石、海綿骨針	良好	にぶい黄色	
10	弥生土器 壺	– – (8.0)	底部布目痕。胴部に付加条2種縄文を施す。	石英、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	
11	弥生土器 壺	– – (10.0)	底部布目痕。胴部に付加条1種でRのS巻き、LのZ巻きを付加する。	石英粒多量	良好	暗灰黄色	
12	弥生土器 壺	– – (7.0)	底部布目痕。胴部に付加条1種縄文を施す。	石英、海綿骨針	良好	にぶい黄褐色	
13	弥生土器 壺	– – (8.2)	底部布目痕。胴部に付加条2種縄文を施す。	石英、白色粒	良好	にぶい黄橙色	
14	弥生土器 壺	– – (7.0)	底部木葉痕。胴部付加条縄文。	石英、白色粒	良好	にぶい黄色	
15	弥生土器 壺	– – (10.0)	底部ナデ。胴部単節RL斜縄文。	金雲母、白色粒多量	良好	にぶい黄褐色	
16	弥生土器 壺	– – (6.0)	底部木葉痕。胴部付加条縄文。	白色粒多量	良好	にぶい黄橙色	
17	土製品 紡錘車	上径4.5 下径3.8 高1.7	側面に輪縄不明の付加条縄文、LのS巻きの縄を付加する。	金雲母、海綿骨針	良好	にぶい黄褐色	
18	土師器 壺	– – –	「く」の字口縁破片。	石英、海綿骨針、白色粒	良好	明赤褐色	
19	土師器 壺	– – (6.0)	底部僅かに輪台状。胴部ハケメ。	石英、白色粒	良好	にぶい黄橙色	
20	土師器 壺	– – 4.4	底部ヘラケズリ。	石英、白色粒多量	良好	にぶい黄褐色	
21	土師器 壺	– – (7.0)	底部ヘラケズリ。	石英、海綿骨針	良好	にぶい黄褐色	

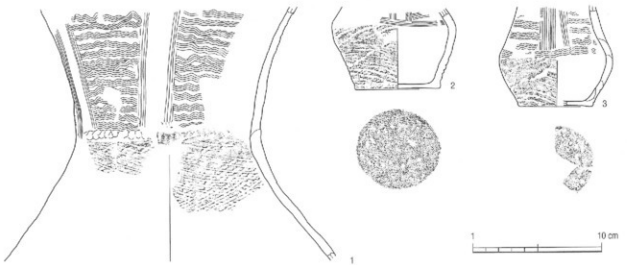
が鋭角で南西の角はカーブの小さな隅丸形。西壁と東壁の方向とカーブの度合いがわずかに違う。 **主軸方向** N―17°―W **壁** 壁高は約20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **ピット** 10箇所。P２、P３、P８、P５は最終段階の主柱穴。P１、P10、P４、P７は床下で確認した古い主柱穴。２回以上の建て替えによるものと思われる。 **炉** ２か所ある。中央の炉は、長径62cm、短径49cmの楕円形で深さ6cm。炉２は長径82cm、短径65cmの楕円形で深さ5cm。 **覆土** 覆土中には多量の炭化材が含まれる。やや西北側にかたよって出土しているように見える。 **遺物** 覆土から弥生時代後期後半期の土器と古墳時代前期の土師器片が出土している。 **所見** 複数の主柱穴と炉１の配置は弥生時代の住居跡の建て替えによるものと見られ、焼失住居を示す炭化材や土師器片の出土、炉２の配置と北西角の鋭角さと西壁の直線的な様子は小型の古墳時代前期の住居跡を連想させる。床面レベルのほとんどかわらなかった住居２軒の重複と思われる。

２号住居跡（第７・８図）

位置 調査区の南部Ｊ４グリッドにある。 **規模と平面形** 北壁4.52ｍ。隅が直角で南半分が溝に切られ



第７図　２号住居跡



第８図　２号住居跡出土遺物

表２　２号住居跡出土遺物観察表

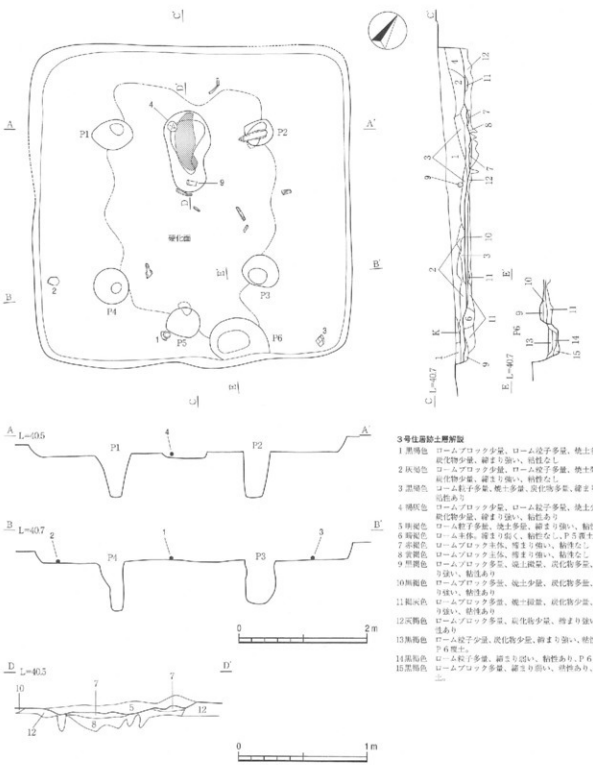
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 大型壺	－ － －	頸部文様帯、４本1単位の櫛描状工具による擬区画線２本で４単位に区画し、区画内に波状文を充填する。胴部構文は付加条２種で、LのZ巻きとRのS巻きの羽状縄文構成。	石英、金雲母	良好	にぶい黄橙色	
2	弥生土器 小型壺	－ － 6.6	胴上半部の区画文は４区画で、横区画線の後擬区画線を入れ、区画内に斜位の直状文を充填している。下半部は付加条２種縄文で、上半はRのS巻き、下半はLのZ巻きの羽状構成である。底部木目痕。	石英、滴曜岩針、白色砂	良好	にぶい黄色	
3	弥生土器 小型壺	－ － 5.6	胴上半部の区画文は４区画で、横区画線の後擬区画線を入れ、区画内に波状文を充填している。下半部は付加条２種縄文で、上半はRのS巻き、下半はLのZ巻きの羽状縄文である。底部木目痕。	石英、滴曜岩針、白色砂	良好	明黄褐色	

て不明瞭である。南側にもう一軒別の竪穴住居と重複している可能性がある。　**主軸方向**　N－8°－W　**壁**　壁高は北側で約４cm、南側は床面に段差があり、深さ９cmである。　**床**　２号溝に切られている。　**ピット**　12箇所。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４は主柱穴。　**炉　－　覆土**　覆土は１層で、自然堆積と考えられる。南側の床下からは別の住居跡の床面が確認された。　**遺物**　覆土から１の大型壺、２・３の小型壺が出土している。　**所見**　土層断面と掘り方下の調査から、範囲は不明瞭だがもう一軒別の古い住居跡の痕跡が確認されている。弥生時代後期十王台式期の住居跡である。

３号住居跡（第９～11図）

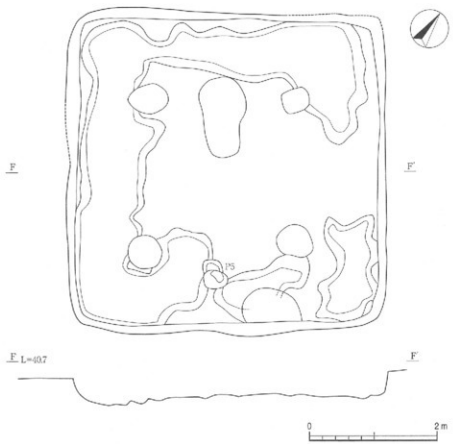
位置　調査区の南部Ｊ５グリッドにある。　**規模と平面形**　5.01×4.89ｍ。隅丸方形。　**主軸方向**　N－36°－W　**壁**　壁高は約35cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　Ｐ６からＰ５の北側と４本柱の内側が硬化

している。　**ピット**　6箇所。P1からP4は主柱穴、P5は出入り口ピット、P6は通称貯蔵穴と呼ばれる穴。住居跡の床下は周辺部をやや深く掘り込む掘り方を持っている。　**炉**　長径126cm、短径72cmの長楕円形で深さ9cm。　**覆土**　覆土は4層で、全体を覆うのは3層、壁際に1層堆積している。上層堆積はブロックを均質に含み、人的な埋め戻し土層である。下層に炭化物を含む。　**遺物**　覆土から古墳時代前期の土師器が出土している。土師器の高坏は脚部の大きく開脚する小型高坏である。弥生土器片も破片で混入している。



第9図　3号住居跡

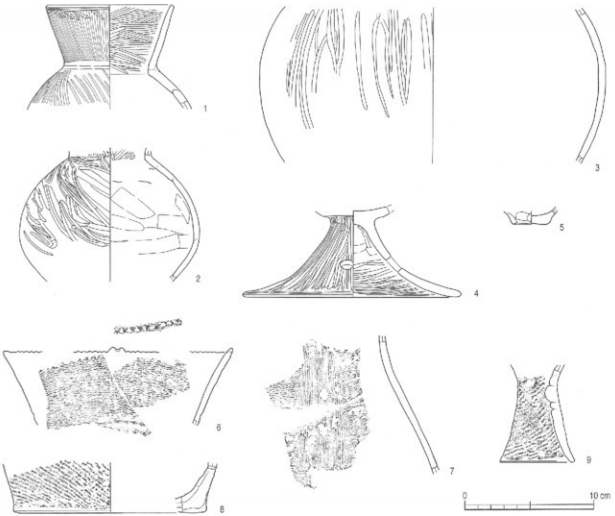
所見　住居の形態が古墳時代前期でも古い形であり、小型高坏を持っている点から古墳時代前期前半代の住居跡と考えられる。



第10図　3号住居跡掘り方

表3　3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	9.7 － －	体部外面縦位のミガキ、口縁部外面縦位のミガキ、内面横位のミガキ。	石英、海綿骨針、赤褐色粒	良好	明赤褐色	
2	土師器 中型壺	－ － －	体部外面ミガキ、内面ヘラナデ。	白色粒、石英、赤褐色粒	良好	黄褐色	
3	土師器 壺	－ － －	体部外面縦位のミガキ、内面摩耗。	石英、長石、海綿骨針、赤褐色粒	良好	明褐色	
4	土師器 高坏	－ － 16.8	脚部外面縦位ミガキ、内面横位のミガキ、裾部に4箇所円孔が開く。	チャート、石英、海綿骨針	良好	橙色	
5	手捏土器	－ － 3.0	外面ナデ。	石英粒・小礫、暗赤褐色粒	良好	黒色	
6	弥生土器 壺	(17.7) － －	口縁部外面には5本1単位の櫛描状工具による波状文6段施し、口唇部には擬縄状工具による刺突と2つ山の小突起を持つ。	金雲母、暗赤褐色粒、海綿骨針	良好	黒褐色	

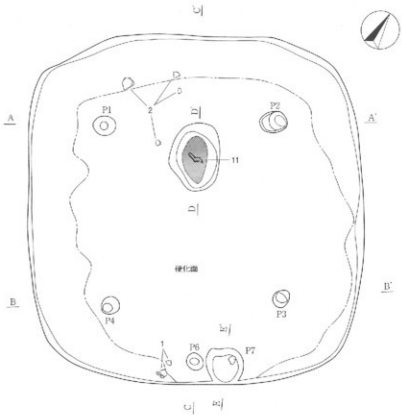


第11図　3号住居跡出土遺物

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	弥生土器 中型壺	— — —	5本1単位の櫛歯状工具による縦区画3本、区画内波状文を充填。櫛歯は深くシャープ。	石英、金雲母、暗赤褐色粒	良好	黒色	
8	弥生土器 壺	— — (15.1)	外面付加条1種の縄文で、付加条縄はLのZ巻き原体。	石英多量、砂粒	良好	浅黄橙色	
9	弥生土器 高坏	— — (5.6)	脚部外面、軸縄不明の付加条縄文、LのZ巻きとRのS巻きの羽状構成。	石英、長石、海綿骨針、暗赤褐色粒	良好	橙色	

4号住居跡（第12～14図）

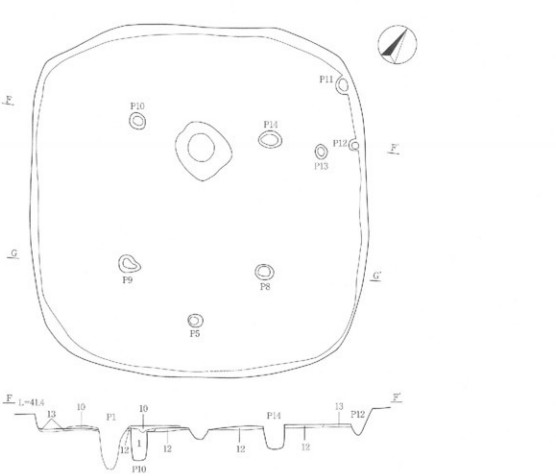
位置　調査区の南部Ⅰ4グリッドにある。　**規模と平面形**　5.48×5.11m。隅丸方形。　**主軸方向**　N—35°—W　**壁**　壁高は約23cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　P6の周辺から4本の主柱穴を囲む範囲が硬化している。　**ピット**　13箇所。P1～P4は配置から見て主柱穴と考えられる。P6は、出入り口ピットで、



4号住居跡土層解説

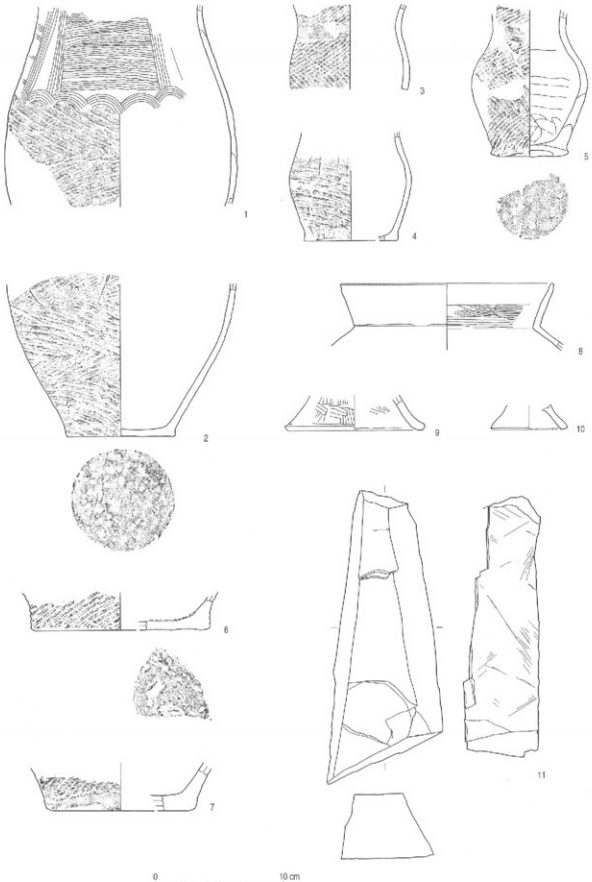
1 黒色	ローム ブロック少量、ローム粒子多量、炭土多量、炭化物少量、締まり強い、粘性なし
2 黒褐色	ローム ブロック少量、ローム粒子多量、炭土細量、炭化物少量、締まり強い、粘性なし
3 暗褐色	ローム粒子多量、炭土多量、炭化物多量、締まり強い、粘性あり
4 黒色	ローム ブロック少量、ローム粒子多量、炭土少量、炭化物少量、締まり強い、粘性あり
5 明褐色	ローム粒子多量、焼土多量、締まり強い、粘性あり
6 暗褐色	ローム粒子多量、焼土多量、締まり強い、粘性あり
7 暗褐色	ローム粒子少量、焼土多量、締まり強い、粘性あり
8 赤褐色	ローム ブロック多量、焼土多量、締まり強い、粘性なし
9 暗赤褐色	ローム ブロック多量、炭土少量、締まり弱い、粘性なし
10 灰褐色	ローム ブロック多量、焼土細量、炭化物少量、締まり強い、粘性あり
11 褐灰色	ローム ブロック多量、焼土細量、炭化物少量、締まり強い、粘性あり
12 明褐色	ローム ブロック多量、炭化物少量、締まり強い、粘性あり
13 灰褐色	ローム ブロック多量、炭化物少量、締まり強い、粘性あり

第12図　4号住居跡



第13図　4号住居跡掘り方

出入り口ピット脇のやや大きめで浅い穴は、古墳時代前期以降に見られる穴で、いわゆる「貯蔵穴」と呼ばれる穴である。床下面から確認されたＰ８・９・10・14は、古い段階の主柱穴と見られる。Ｐ５は古い段階の出入り口ピットである。Ｐ７が古い段階から開いていたかどうかは不明である。　**炉**　長径90cm、短径78cmの長楕円形で深さ8cm。南側に炉石を設置している。　**覆土**　覆土は５層で、全体を覆う基本層は３層で、床の一部を覆う層と壁際の堆積層がある。最上層は自然堆積層、中層は人為堆積である。　**遺物**　覆土から弥生土器を主体に土師器が混入して出土している。　**所見**　弥生時代の住居形態により近いが、３・５号住居跡と軸線を合わせ、出入り口ピットの際にはそれらの住居跡と似た位置に浅い穴が空いている。同時併存や古墳時代前期の住居跡と連続したより古い時期の住居の可能性も考えられる。Ｐ７は出入り口ピットのＰ６と近い位置にあり、胎盤埋納坑説として唱えられるような戸口と関連する穴と思われる。



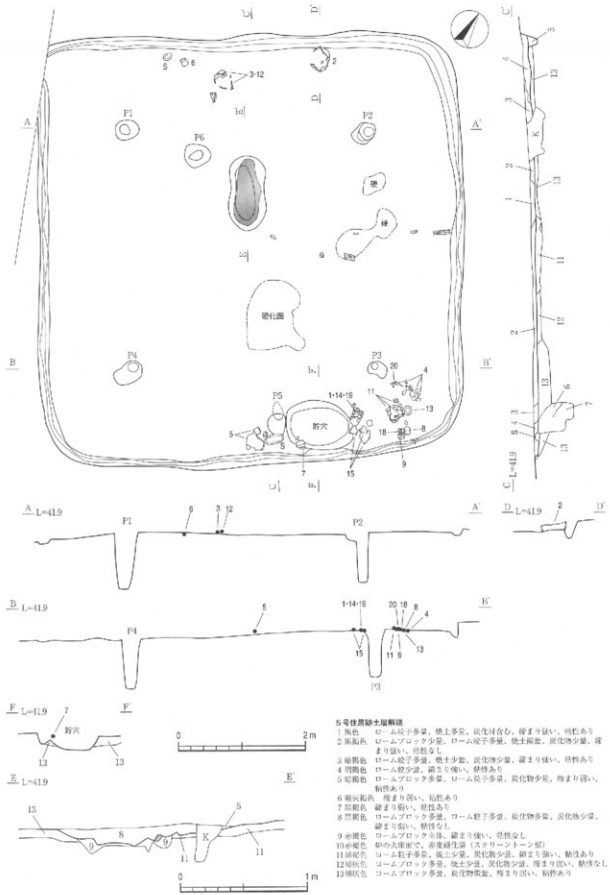
第 14 図　4 号住居跡出土遺物

表4　4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径器高底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器壺	– –	胴上部文様帯波状文を8段以上、下から上に向かって重ね、鋸歯5本の縦区画は、2単位づつ、4つに縦区画する。横区画は連弧文を右から左に施している。胴部は付加条縄文で、LのZ巻きとRのS巻きにした原体で羽状構成。	金雲母	良好	浅黄橙色	
2	弥生土器壺	– 8.4	底部布目痕。胴部下半軸縄の不鮮明な付加条縄文。RのS巻きとLのZ巻原体の羽状構成。	石英	良好	にぶい橙色	
3	弥生土器壺	– –	口縁部には付加条1種でRをS巻きにした原体を使用。頸部の無文部を挟んで底部は付加条1種、RをS巻きとLのZ巻きにした原体を使用した羽状構成。	海綿骨針、石英	良好	にぶい褐色	
4	弥生土器壺	– (7.2)	胴部上半、6本1単位の鋸歯状工具による縦区画、区画内に同じ工具による波状文を充填。胴部下半軸縄の不鮮明な付加条縄文。LのZ巻きにした原体を使用。	白色粒、チャート	やや不良	にぶい黄橙色	
5	弥生土器壺	– 6.0	底部は厚く、布目痕。胴部は軸縄不明の付加条縄文で、RのS巻きとLのZ巻き原体による羽状構成。頸部に無文帯を持つ。	白色粒	良好	にぶい橙色	
6	弥生土器壺	– (13.8)	底部布目痕。胴部付加条1種付加2条、RをS巻きにした原体を使用している。	石英、長石	良好	にぶい黄橙色	
7	弥生土器壺	– (11.6)	底部布目痕。胴部付加条1種付加2条、RをS巻きにした原体を使用している。	石英、長石、角閃石、白色粒、砂礫	良好	浅黄橙色	
8	土師器甕	(16.4) – –	〈 ｜ の字口縁、口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面上位ヨコナデ、下位ハケメ。	金雲母、石英、長石、砂礫	良好	浅黄色	
9	土師器高坏	– – (10.6)	脚部外面ミガキ。内面ヘラケズリ後ミガキ。	石英	良好	暗褐色	
10	土師器ミニチュア台付甕	– (3.0)	脚部内外面ナデ。	長石、砂粒	良好	にぶい橙色	
11	石製品枕石	長23.2 幅9.0 厚5.9	粘板岩製。重さ1300g。				

5号住居跡（第15～18図）

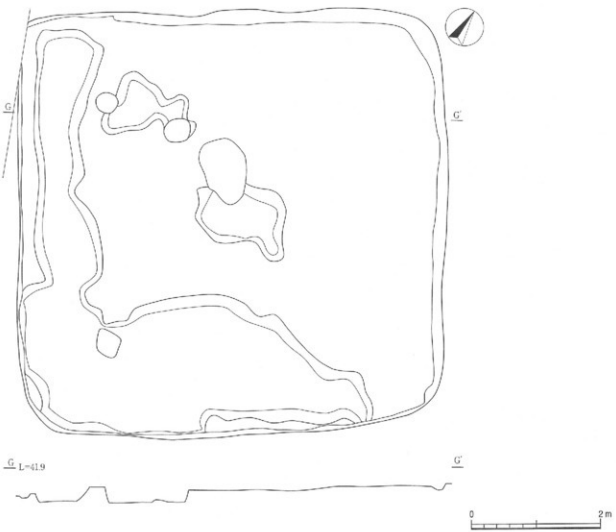
位置　調査区の南部H4グリッドにある。　**規模と平面形**　6.68×6.62m。僅かに隅が丸い方形。　**主軸方向**　N—34°—W　**壁**　壁高は7cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面の残存する範囲が一部に限られており、床面の残存が少ない。住居跡床下には、西壁から南壁際にやや下がる掘り方を持つ。　**ピット**　7箇所。　**炉**　長径118cm、短径59cmの長楕円形で深さ14cm。　**覆土**　覆土は上層が自然堆積層、中層は人為堆積である。炭化物、炭化材を含む。　**遺物**　床面や覆土から、大型の壺（2～4）と平底の小型壺（7,8）、坩（9）、元屋敷系の高坏（15）、甕の口縁部で細長い鉢型の体部をした非常に特徴的な形態の土器（14）、端部面取り甕（13）、小型高坏片（16,17）等古墳時代前期前半代の土師器が出土している。　**所見**　焼失家屋（失火という意味に限定するのではない）で、遺物の残し置き、焼失、埋め戻しの過程を示すものかと思われる。



5号住居跡土層解説

1 黒色　ローム粒子多量、焼土多量、炭化材含む、締まり強い、粘性あり
2 黒褐色　ロームブロック少量、ローム粒子多量、焼土微量、炭化物少量、締まり強い、粘性なし
3 暗褐色　ローム粒子多量、焼土少量、炭化物少量、締まり強い、粘性あり
4 明褐色　ローム粒少量、締まり強い、粘性あり
5 暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒子多量、炭化物少量、極まり弱い、粘性あり
6 暗灰褐色　極まり弱い、粘性あり
7 黒褐色　締まり弱い、粘性あり
8 黒褐色　ロームブロック多量、ローム粒子多量、炭化物多量、炭化物少量、締まり弱い、粘性なし
9 赤褐色　ロームブロック主体、締まり強い、粘性なし
10 赤褐色　炉の火床面で、赤変硬化器（スクリーントーン部）
11 暗灰色　ローム粒子多量、炭土少量、炭化物少量、締まり強い、粘性あり
12 暗灰色　ロームブロック多量、焼土少量、炭化物少量、極まり弱い、粘性なし
13 暗灰色　ロームブロック多量、炭化物微量、極まり弱い、粘性あり

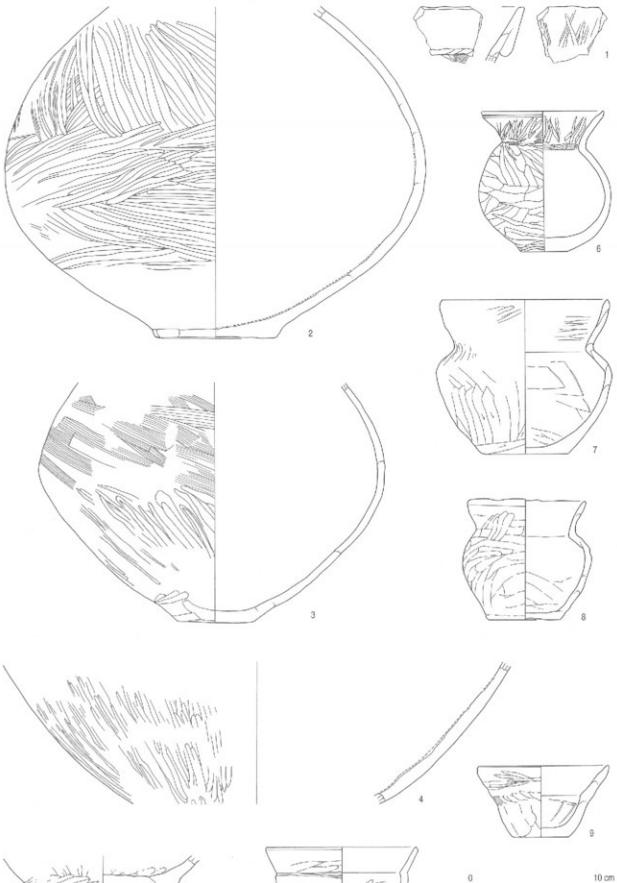
第15図　5号住居跡



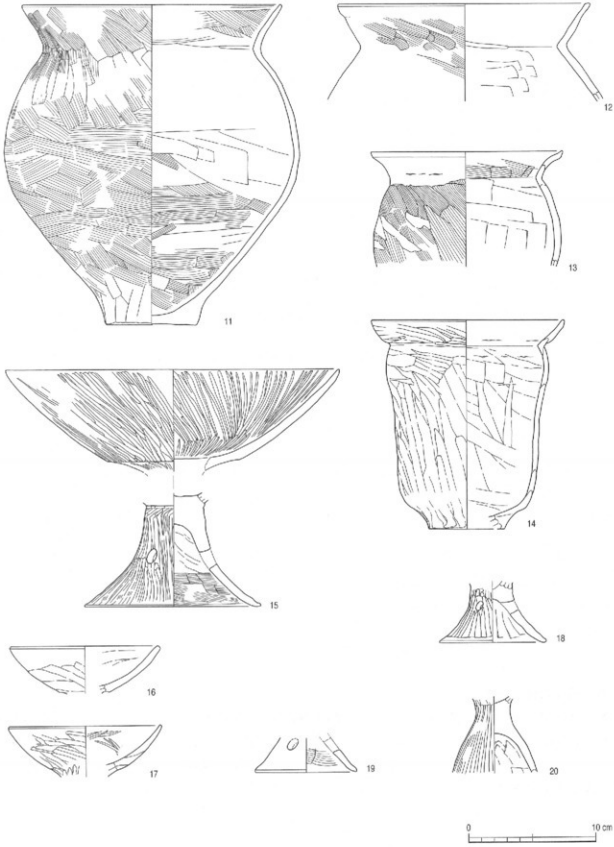
第16図　5号住居跡掘り方

表5　5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 複合口縁壺	– – –	口縁部内面赤彩、ミガキ。	石英粒	良好	橙色	
2	土師器 壺	– – 9.5	胴部下半部に最大径を持ち、底部はやや突出する。外面斜位のミガキ。	石英、角閃石、白色粒、赤褐色粒	普通	にぶい黄橙色	
3	土師器 壺	– – 6.0	胴部外面上半部ハケメ、下半部ミガキ。	石英、長石、白色粒	普通	にぶい黄橙色	
4	土師器 壺	– – –	胴部下半縦方向のミガキ。	石英、長石、砂礫	普通	にぶい黄橙色	内面黒斑
5	土師器 壺	– – (11.2)	底部片。外面ヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	石英、長石粒多量	良好	淺黄色	



第17図　5号住居跡出土遺物1

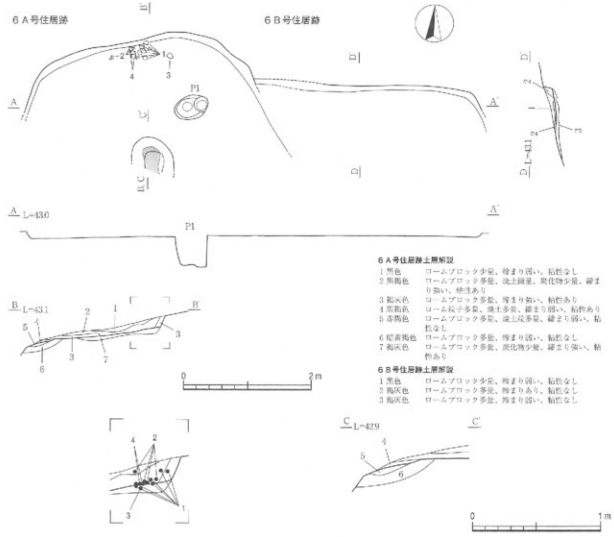


第18図　5号住居跡出土遺物2

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
6	弥生土器 壺	9.5 10.9 3.5	体部外面、口縁部内外面ミガキ。	石英、角閃石	良好	浅黄色	
7	土師器 壺	13.8 12.1 3.5	口縁部内外面ミガキ、体部外面ヘラナデ、内面上半部ヘラナデ、下半部指ナデ。	石英、チャート粒、白色粒、褐色粒	良好	橙色	
8	土師器 小型甕	9.0 5.5 9.4	体部外面ヘラナデ、口縁部内外面ヘラナデ。	石英、白色粒	良好	明褐色	
9	土師器 壺	12.0 5.6 4.4	体部外面ヘラナデ、口縁部内外面ヘラナデ。	石英、角閃石、白色粒	良好	にぶい黄橙色	
10	土師器 壺	(11.6) － －	鉢型の体部から、口縁部は外傾して開く。	石英粒、砂粒海綿骨針、砂粒	良好	明黄褐色	
11	甕	(16.4) 25.3 7.0	くの字口縁で、底部はやや突出する。外面は斜位のハケメで胴部中位はハケメが横方向に施される。	白色微粒、赤く発色する粘土	良好	明褐色	
12	土師器 甕	(20.0) － －	「く」の字口縁、口縁部外面～胴部外面ハケメ。胴部外面煤付着。	石英・長石	良好	黒褐色	
13	土師器 甕	15.0 － －	胴部外面ハケメ、口縁部内面ハケメ。口縁端部面取り、口唇部を摘め上方に摘み上げる。	石英、角閃石、白色粒	良好	明黄褐色	
14	甕	15.2 16.5 6.0	底部は平底で突出し、胴部は張りがなく直線的に立ち上がり、口縁部は強く「く」の字状に開く。	石英、骨針、角閃石極少粒	良好	暗褐色	
15	土師器 高坏	26.2 － 14.0	脚部外面ミガキ。内面ハケメ。透かし孔3箇所。	石英、雲母、白色粒	良好	にぶい黄色	
16	土師器 小型高坏	(11.8) － －	坏部片。内外面ヘラナデ。	石英粒、砂粒	良好	橙色	
17	土師器 小型高坏	12.0 － －	外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	片岩、石英、赤褐色粒	良好	明黄褐色	
18	土師器 小型高坏	－ － 8.3	脚部外面ヘラミガキ。	石英、白色粒	良好	浅黄色	
19	土師器 器台	－ － 8.0	脚部外面ナデ。透かし孔3カ所。	角閃石、白色粒	良好	橙色	
20	土師器 高坏	－ － －	脚部片。外面脆ミガキ、内面ヘラナデ。	石英、角閃石	良好	黄橙色	

6A号住居跡（第19・20）

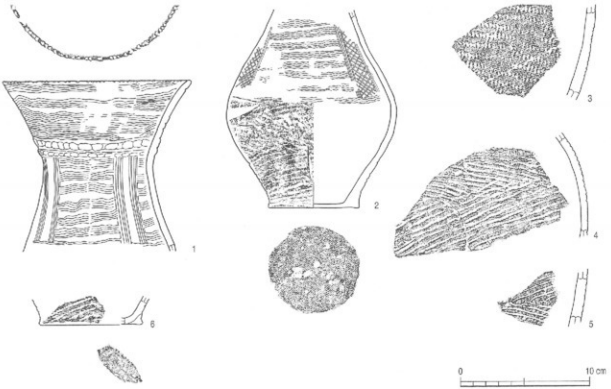
位置　調査区の中央部F4グリッドにある。　**規模と平面形**　南北方向2.2mが残存している。　**主軸方向**　N—17°—W　**壁**　壁高は約5cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床 — ピット — 炉 — 覆土**　覆土は3層である。　**遺物**　覆土から十王台期の弥生土器が出土している。　**所見**　出土遺物から弥生時代後期の十王台式期の住居跡と考えられる。



第19図　6A・6B号住居跡

表6　6A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	14.6 － －	口縁部にキザミ目、口縁部に波状文を5段、上から下に施し、頸部隆帯2段、頸部下半には縦区画4単位で区画内に波状文を充填する。胴部との境に横区画の波状文を施す。	石英	良好	にぶい黄褐色	
2	弥生土器 壺	－ 7.0	底部布目痕。胴部下半は軸縄不明の付加条縄文で、及の5帯きとLの2帯きを3段の三状構成。縄文施文の後、上半部に5本1単位の波状文で横区画を入れ、2本ごつの3単位の縦区画を施し、狭い区画間に格子目文、広い区画間に波縄文を8段以上充填する。	チャート	良好	黄橙色	
3	弥生土器 壺	－ － －	付加条2種縄文。	金雲母、白色粒	良好	明黄褐色	
4	弥生土器 壺	－ － －	胴上半部波状文、下半付加条縄文。	白色粒多量	良好	にぶい黄褐色	
5	弥生土器 壺	－ － －	付加条2種縄文、沈状構成。	白色粒多量	良好	明黄褐色	
6	弥生土器 壺	－ (8.0)	底部布目痕。胴部付加条縄文。	白色・暗褐色粒	良好	明黄褐色	



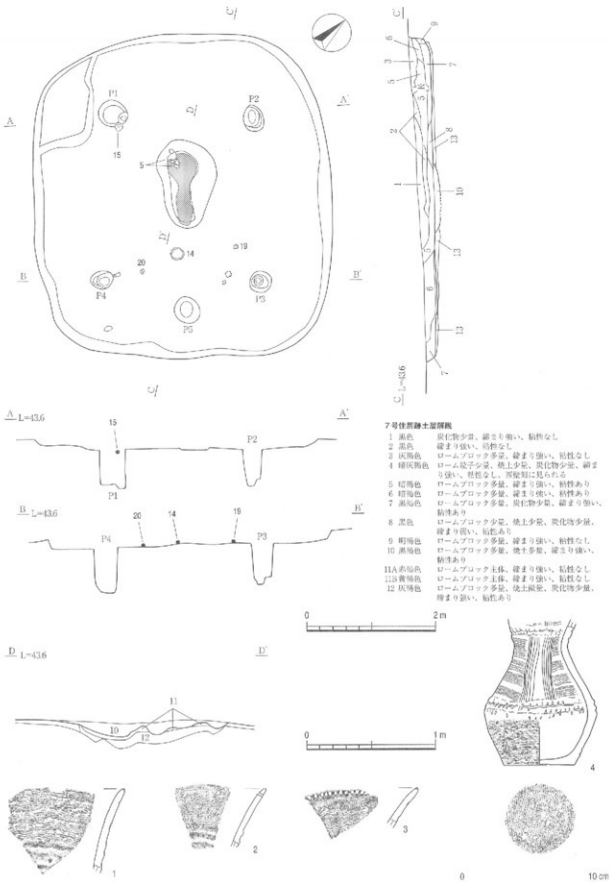
第20図　6A号住居跡出土遺物

6B号住居跡（第19図）

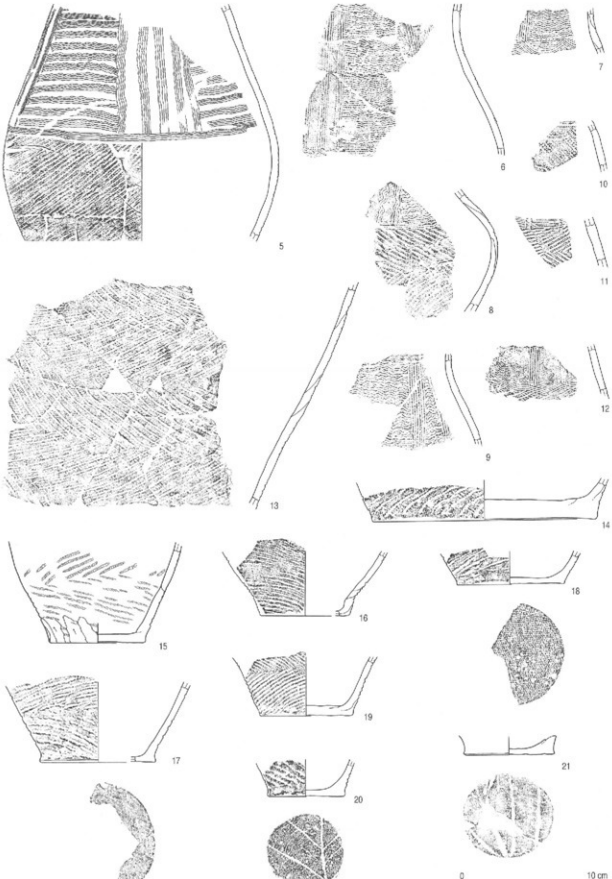
位置　調査区の中央部F4グリッドにある。　**規模と平面形**　南北方向1.1mが残存している。　**主軸方向**　—　**壁**　壁高は約12cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　—　**ピット**　—　**炉**　—　**覆土**　覆土は2層である。　**遺物**　覆土から土師器の小型壺の体部片が出土している。　**所見**　出土遺物から古墳時代前期の住居跡と考えられる。

7号住居跡（第21～23図）

位置　調査区の中央部F3グリッドにある。　**規模と平面形**　5.31×4.61 m、隅丸方形。　**主軸方向**　N—48°—W　**壁**　壁高は15～31cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　—　**ピット**　—　**炉**　長径198cm、短径95cmの長楕円形で深さ10cm。　**覆土**　覆土は住居の床周辺の埋没層が2層で最初に堆積し、床面中央部の炉の上の堆積層は3層で、周辺堆積層とは明瞭に分かれる。炉の上の堆積層の最上部は黒色土の自然堆積である。　**遺物**　覆土から十王台式期の弥生土器が出土している。　**所見**　住居跡は住居として機能しなくなった後、周辺部は埋没しているが、住居跡の中心の炉の部分は露出した状態であり、周辺の住居跡埋没主体層とは別の堆積とし埋没している。住居の機能喪失後、炉の部分を中心としたなんらかの再利用が一定期間あった可能性が考えられる。



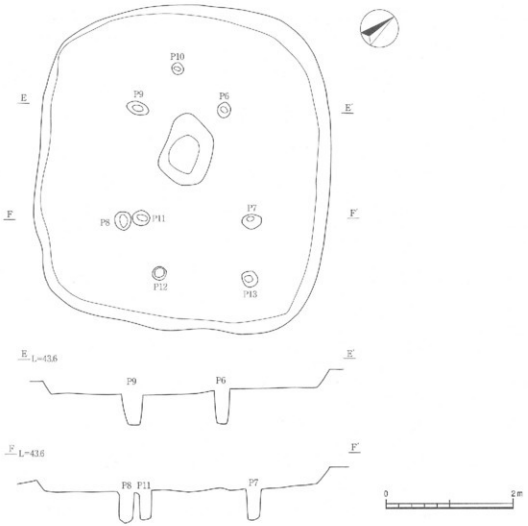
第21図　7号住居跡・出土遺物



第22図　7号住居跡出土遺物

表7　7号住居跡出土遺物観察表

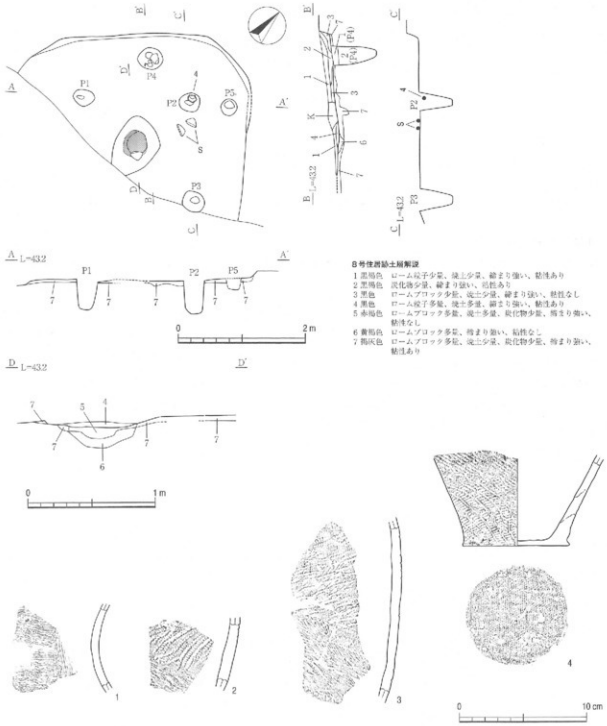
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	－ － －	口縁部片。口唇部にキザミ、口縁部外面に櫛歯4本の波状文を施す。	石英、白色粒	良好	黄褐色	
2	弥生土器 壺	－ － －	口縁部片。口唇部にキザミ。口縁部外面波状文。口縁部に小孔2箇所開く。頸部に隆帯。	石英、白色粒	良好	黄橙色	
3	弥生土器 壺	－ － －	口縁部片。口唇部にキザミ、口縁部外面に櫛歯3本の波状文を施す。	石英、白色粒	良好	黒褐色	
4	弥生土器 壺	－ － 5.5	頸部隆帯は2条で低い。胴上半部は3単位の縦区画で、5段の波状文を充填する。胴部隆帯は3条でキザミを入れる。底部は布目痕。	チャート、石英、海綿骨針、白色粒	良好	浅黄色	
5	弥生土器 壺	－ － －	胴部上半は、5本の櫛歯状工具を使用した5条1単位の縦区画波状文の後区画内に横走する波状文を充填する。胴下半部は、付加条1種にRのS巻きの原体を使用する。	石英、海綿骨針、白色粒	良好	淡黄色	
6	弥生土器 壺	－ － －	5本1条の櫛歯状工具で3条1単位の縦区画、区画内に、波状文を充填する。	石英、海綿骨針、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
7	弥生土器 壺	－ － －	5本1条の櫛歯状工具で下向き連弧文、縦区画内に、波状文を充填する。	海綿骨針、白色粒	良好	黄灰色	
8	弥生土器 壺	－ － －	胴部輪縄不明の付加条で、LのZ巻きとRのS巻き原体を使用。胴上半部の文様帯は3本1単位の波状文を横に入れた後、縦方向の波状文で区画する。	石英、チャート、海綿骨針	良好	暗黄褐色	
9	弥生土器 壺	－ － －	頸部隆帯貼り付け。胴部下半淡状文施文後、7本1条の縦区画。	石英、海綿骨針、白色粒	良好	明赤褐色	
10	弥生土器 壺	－ － －	付加条1種でLのZ巻き原体を使用。下向の連弧文を左から右に施す。	金雲母、海綿骨針	良好	橙色	
11	弥生土器 壺	－ － －	輪縄不明の付加条縄文でLのZ巻きとRのS巻きの原体で羽状構成し、重状文を施す。	石英粒多量、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
12	弥生土器 壺	－ － －	胴部付加条2種縄文を施文。胴部文様帯との間を連弧文で区間し、6本1条の櫛歯状工具で波状文を2段以上施し、同じ箇所で、2条単位の縦区画を入れる。	石英、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
13	弥生土器 壺	－ － －	胴部下半片。付加条2種縄文で、RのS巻きとLのZ巻きの原体で羽状構成。	石英、白色粒	良好	黄橙色	
14	弥生土器 大型壺	－ － 17.3	底部は砂目。胴下半部は、輪縄不明の付加条2種縄文で、RのS巻きの原体を使用している。	石英、金雲母、白色粒	良好	明黄褐色	
15	弥生土器 壺	－ － 7.4	底部は砂目。胴下半部は、輪縄不明の付加条縄文、RのS巻きとLのZ巻きの羽状構成。	石英	良好	灰黄褐色	
16	弥生土器 壺	－ － (7.0)	胴部は輪縄不明な付加条縄文で、LのZ巻きの原体を使用。	石英、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
17	弥生土器 中～小型壺	－ － 9.0	底部布目痕。輪縄不明の付加条縄文で、RのS巻きとLのZ巻き原体を使用。	石英、海綿骨針、白色粒	良好	にぶい黄橙色	
18	弥生土器 壺	－ － 8.0	底部布目痕。輪縄不明の付加条縄文で、LのS巻き原体を使用。	石英、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
19	弥生土器 壺	－ － 7.0	底部木葉痕。胴部は付加条1種縄文で、LのZ巻きとRのS巻きの羽状構成。	石英、白色粒多量	良好	にぶい黄色	
20	弥生土器 壺	－ － 6.0	底部木葉痕。胴部は輪縄不鮮明な付加条縄文で、LのZ巻きの原体を使用。	石英、白色粒	良好	にぶい黄色	
21	弥生土器 小型壺	－ － 7.0	底部木葉痕。	海綿骨針、チャート礫	良好	にぶい黄色	



第23図　7号住居跡掘り方

8号住居跡（第24図）

位置　調査区の中央部Ｆ４～Ｆ５グリッドにある。　**規模と平面形**　―　**主軸方向**　N―45°―W　**壁**　壁高は0～20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　―　**ピット**　4箇所。　**炉**　長径112cm以上、短径65cmの長楕円形で深さ4cm。　**覆土**　覆土は3層で、自然堆積と考えられる。　**遺物**　覆土から十王台式期の弥生土器が出土している。　**所見**　出土した十王台式土器片は、施文された縄の特徴から、十王台式土器の作り手としては不慣れな他地域の土器の作り手が作っていると思われる。



第24図　8号住居跡・出土遺物

表8　8号住居跡出土遺物観察表

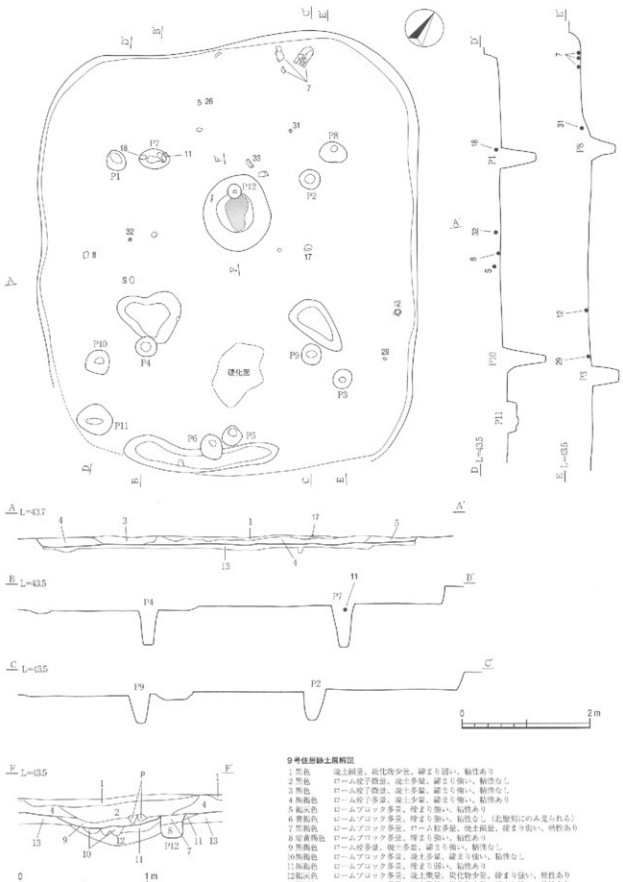
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	－ － －	5本1単位の櫛歯状工具による縦区画と区画内に波状文を充填。	石英、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
2	弥生土器 壺	－ － －	胴部上半付加条2種縄文、軸縄は無節LR、下半はRの縄をRに付加しており、付加した縄に撚り戻しが起きている。	石英、金雲母、海綿骨針	良好	明黄褐色	
3	弥生土器 壺	－ － －	胴部上半付加条2種縄文、軸縄は無節LR、下半はRの縄をRに付加しており、付加した縄に撚り戻しが起きている。	石英、片岩粒、海綿骨針	良好	黒褐色	
4	弥生土器 壺	－ － 8.3	底部布目痕、胴部下半に付加条2種で、RのS巻きとLのZ巻きの原体を使用。	石英、海綿骨針、白色粒	良好	にぶい黄橙色	

9号住居跡（第25～27図）

位置　調査区の中央部E4グリッドにある。　**規模と平面形**　6.55×5.87。隅丸長方形。　**主軸方向**　N－37°－W　**壁**　壁高は18cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　－　**ピット**　12箇所。　**炉**　長径119cm、短径105cmの長楕円形で深さ6cm。　**覆土**　覆土は5層で、主体層が3層、壁際1層、炉の上に1層主層を切り込むように堆積している。　**遺物**　覆土から十王台式期の弥生土器と土製品が出土している。　**所見**　P8・3・10・1の主柱穴とP6出入り口ピットで構成される上屋とP2・9・4・7主柱穴とP5出入り口ピットで構成される上屋の段階があったものと考えられる。7号住居と同様に、炉の部分の埋没に、通常では考えにくい覆土の堆積を示している。7号住居跡と比べ、炉の上の住居埋没土層と別の堆積層の範囲が狭く、まるでなにか覆かれていたものが、取り去られて別の土が堆積しているかのようである。住居機能終了後の利用痕跡と考えられる。

表9　9号住居跡出土遺物観察表

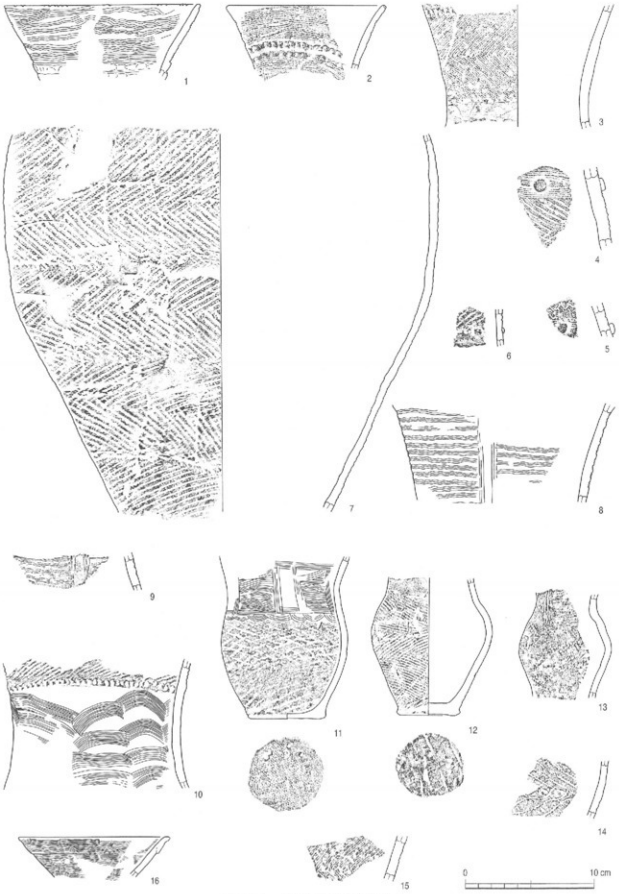
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	－ － －	口唇部にキザミ。口縁部は4本1単位の櫛歯状工具によるくずれた波状文が8～9段入りさらに、指頭で押した低い突帯が2段が入る。	石英、海綿骨針	良好	灰黄褐色	
2	弥生土器 壺	(12.4) － －	口唇部にキザミ。口縁部は5本1単位の櫛歯状工具によるくずれた波状文が3段入る。指頭で押した低い突帯をはさんで櫛歯状工具による区画文が入る。	海綿骨針、金雲母	良好	にぶい黄褐色	
3	弥生土器 壺	(4.5) － －	口縁部上位縦刺突、軸縄LRにLのZ巻きの縄と軸縄RにLのZ巻きを付加した縄を結束。	長石、石英、チャート	良好	にぶい黄褐色	
4	弥生土器 壺	－ － －	胴部直状文の上に円文を貼り付け、その下に軸縄不明の付加条縄文でしのZ巻き原体による縄文を施文。	長石、石英	良好	にぶい黄橙色	
5	弥生土器 壺	－ － －	胴部小片、櫛描波状文の下に櫛描直状文で区画し、円文を貼り付ける。	石英	良好	明黄褐色	
6	弥生土器 壺	－ － －	胴部小片、斜交の上に2対の円文を貼り付け円文の上側は無文、下側は付加条縄文。	石英	良好	暗灰黄色	
7	弥生土器 大型甕	－ － (29.8)	胴部は軸縄不明な付加条1種縄文で、LのZ巻きとLのZ巻き原体を使用した羽状構成。	石英、白色・赤色粒	やや不良	浅黄橙色	



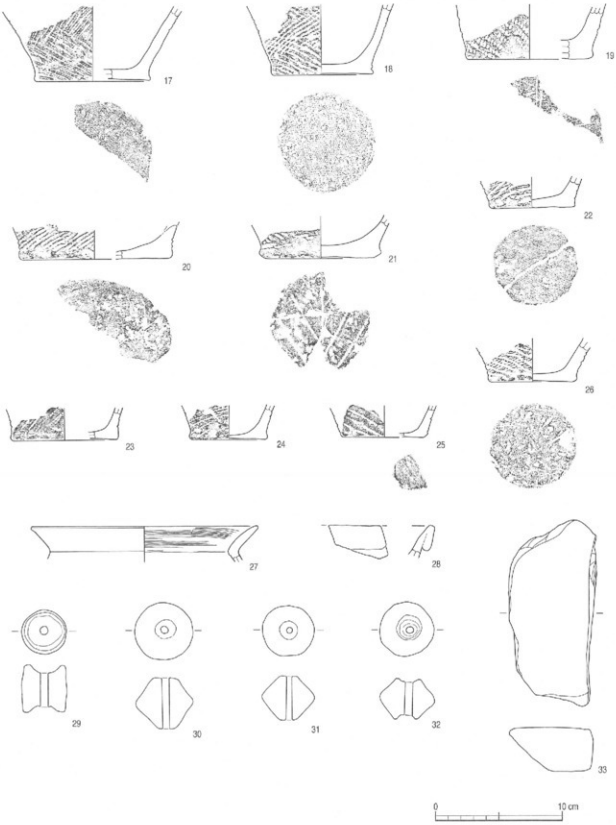
9号住居跡土居解説

1 黒色　流土縁量、炭化物少量、縁まり弱い、粘性あり
2 黒色　ローム粒子微量、流土多量、縁まり強い、粘性なし
3 黒色　ローム粒子微量、流土多量、縁まり強い、粘性なし
4 黒褐色　ローム粒子多量、流土少量、縁まり強い、粘性あり
5 褐灰色　ロームブロック多量、縁まり強い、粘性あり
6 黄褐色　ロームブロック多量、縁まり強い、粘性なし（北壁刻にのみ見られる）
7 黒褐色　ロームブロック多量、ローム粒多量、流土縁量、縁まり弱い、粘性あり
8 暗黄褐色　ロームブロック多量、縁まり強い、粘性あり
9 黒褐色　ローム粒多量、流土多量、縁まり強い、粘性なし
10 黒褐色　ロームブロック多量、流土多量、縁まり強い、粘性なし
11 黒褐色　ロームブロック多量、縁まり弱い、粘性あり
12 褐灰色　ロームブロック多量、流土微量、炭化物少量、縁まり強い、粘性あり
13 褐灰色　ロームブロック多量、流土微量、炭化物少量、縁まり強い、粘性あり

第25図　9号住居跡



第 26 図　9 号住居跡出土遺物 1



第 27 図　9 号住居跡出土遺物 2

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
8	弥生土器 壺	— — —	3本1単位の櫛歯状工具による波状文が3段以上入る。	石英、長石、金雲母、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
9	弥生土器 小型壺	— — —	3本1単位の縦区画、区画内3本1単位の波状文を充填。波状文の沈線はシャープ。	長石、石英、金雲母	良好	にぶい黄橙色	
10	弥生土器 壺	— — —	11本1単位の強歯状工具による5段以上の波状文。付加条1種縄文でLのS巻きの縄を使用している。	長石、石英	良好	褐色	
11	弥生土器 小型壺	— — 6.0	頸部は横区画段縦区画を行い、区画内に波状文を充填させている。胴部は付加条3種縄文で、下半部は軸縄不明の付加条縄文でRのS巻きの原体を使用。底部布目痕。	石英、角閃石、チャート	良好	浅黄色	
12	弥生土器 壺	— — 5.0	胴部煮沸。胴部付加条1種縄文で、LのZ巻きとRのS巻きの原体を使用した羽状構成。底部木葉痕。	石英、長石	良好	黄褐色	
13	弥生土器 小型壺	— — —	3本1単位の縦区画縄内波状文充填。胴部単節RL。	長石、石英、海綿骨針	良好	黄褐色	
14	弥生土器 壺	— — —	付加条2種縄文でLのZ巻きとRのS巻きの原体で羽状構成。	石英、海綿骨針	良好	にぶい黄色	
15	弥生土器 壺	— — —	胴部片。付加条1種で、RのS巻き原体を付加。	長石、石英、角閃石	良好	明褐色	
16	弥生土器 壺	12.0 — —	LR縦部は5本1単位の櫛歯状工具による波状文が7段以上入る。	石英、長石、角閃石、海綿骨針	良好	にぶい黄褐色	
17	弥生土器 壺	— — (9.0)	胴部付加条1種縄文、LのZ巻き縄を付加する。底部布目痕。	石英、チャート	良好	にぶい黄色	
18	弥生土器 壺	— — 8.0	胴部軸縄不明の付加条縄文で、LのZ巻きとRのS巻きの原体をしようした羽状構成。底部布目痕。	長石、石英、角閃石	良好	にぶい黄色	
19	弥生土器 壺	— — (10.0)	胴部単節RL斜縄文。底部木葉痕。	金雲母、微砂粒	良好	にぶい黄橙色	
20	弥生土器 壺	— — —	底部木葉痕。付加条1種、RのS巻きの縄を付加する。	長石、石英	良好	黄褐色	
21	弥生土器 壺	— — 9.4	無節Rの斜縄文。底部木葉痕。	石英、角閃石、金雲母粒少量	良好	赤褐色	
22	弥生土器 壺	— — 6.6	底部布目痕。胴部軸縄不鮮明な付加条縄文でRのS巻きの縄を付加する。	石英、角閃石、海綿骨針	良好	灰黄色	
23	弥生土器 壺	— — (8.6)	胴部軸縄不明の付加条縄文で、RのS巻きの原体を使用。底部ナデ。	海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	
24	弥生土器 壺	— — 6.0	軸縄不鮮明合撚RLか。	海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	
25	弥生土器 壺	— — (6.6)	底部布目痕。胴部は軸縄不明の付加条縄文で、LのZ巻きの縄を使用している。	石英、微砂粒	良好	明黄褐色	
26	弥生土器 壺	— — 7.0	底部布目痕。胴部付加条2種付加1条、LのZ巻きの縄を付加する。	石英、チャート、海綿骨針	良好	橙色	
27	弥生土器 壺	18.0 — —	口縁部外面ヨコナデ、胴部ハケメ。	石英、長石、角閃石	良好	にぶい黄橙色	
28	土師器 甕	— — —	複合口縁。	長石、石英、海綿骨針	良好	明黄褐色	
29	土製品 土錘	—	径3.1、高3.7、孔径0.6、重量30g	海綿骨針、石英	良好	にぶい黄色	

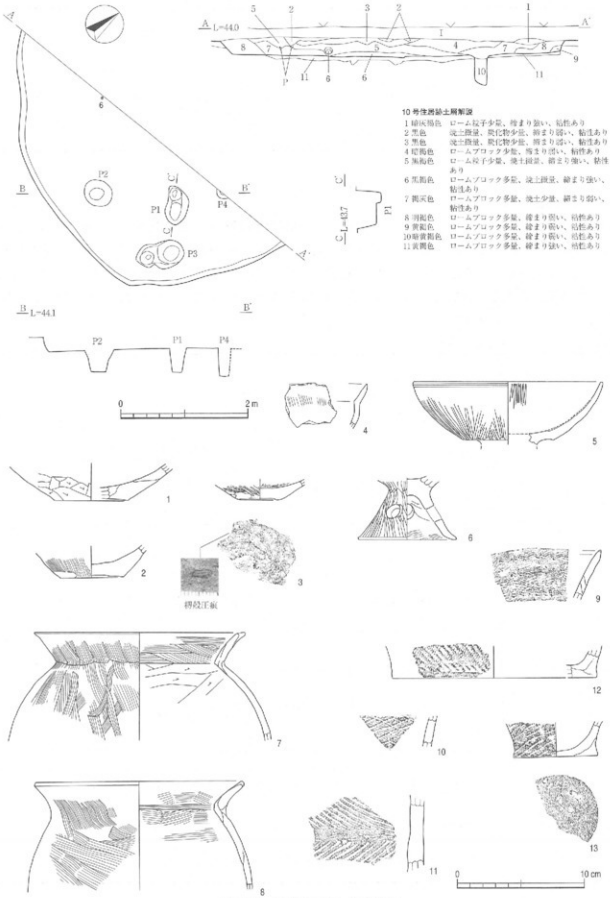
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
30	土製品 土錘		径4.5、高4.0、孔径0.5、重量62ｇ	長石	良好	にぶい黄色	
31	土製品 土錘		径4.2、高3.5、孔径0.46、重量47ｇ	石英、角閃石	良好	明黄褐色	
32	土製品 土錘		径4.3、高3.2、孔径0.55、重量53ｇ	海綿骨針、石英	良好	灰黄褐色	
33	石製品 砥石		長14.5、幅6.7、厚3.4、重量515ｇ、砂岩製				

10号住居跡（第28図）

位置　調査区の中央部北寄りＥ３グリッドにある。　**規模と平面形**　―　**主軸方向**　―　**壁**　壁高は17～24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　―　**ピット**　５箇所。　**炉**　―　**覆土**　覆土は５層で、堆積状態から２層、土堆積積が３枚ある。　**遺物**　覆土から十王台式期の弥生土器片と古墳時代前期の小型高坏、甕が出土している。　**所見**　出土遺物から、古墳時代前期前半代の住居跡と考えられる。ピットは、Ｐ２・４を主柱穴と考え、Ｐ１・３を出入り口ピットと考える。

表10　10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	― ― (5.8)	底部片。胴部外面ナデ、内面粗いヘラケズリ。	石英、白色粒	良好	明褐色	
2	土師器 壺	― ― 5.0	底部片。輪高台。胴部外面ハケメ。内面ヘラナデ、煤付着。	石英、角閃石	良好	黄褐色	
3	土師器 壺	― ― (3.0)	底部片。輪高台、移設付着痕。胴部外面ヘラミガキ	石英、白色粒、細砂粒	良好	明褐色	
4	土師器 壺	― ― ―	頸部外面ハケメ。	石英、白色粒	良好	明黄褐色	
5	土師器 小型高坏	(7.5) ― ―	杯部片。内外面ミガキ。	石英、白色粒	良好	にぶい黄褐色	内面剥離
6	土師器 高坏	― ― 7.6	脚部外面縦位ミガキ、透し孔３箇所開く。	石英、金雲母、海綿骨針	良好	明黄褐色	
7	土師器 甕	16.7 ― ―	くの字口縁。胴部外面は斜位のハケメ。内面上位横位ハケメ、中位ヘラナデ。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	にぶい黄色	
8	土師器 甕	16.7 ― ―	くの字口縁。胴部外面ハケメ。内面口縁部ハケメ、胴部ヘラケズリ。	石英、白色粒、砂粒	良好	灰黄褐色	
9	弥生土器 壺	― ― ―	口唇部ヘラ状工具によるキザミ、口縁部３本１単位の櫛描による５条の波状文。	石英、海綿骨針、白色粒白色酸粒	良好	黄褐色	
10	弥生土器 壺	― ― ―	胴部片。付加条３種縄文。	白色粒	良好	にぶい黄褐色	
11	弥生土器 壺	― ― ―	胴部片。付加条２種で、LのZ巻きとRのS巻き原体を結束させている。	石英、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
12	弥生土器 大型壺	― ― (16.0)	底部砂目痕。胴部単節RL縄文。	白色粒	良好	黄橙色	
13	弥生土器 小型壺	― ― 6.6	底部布目痕。胴部付加条２種縄文、RのS巻きの縄を付加する。	石英、白色粒	良好	にぶい黄褐色	

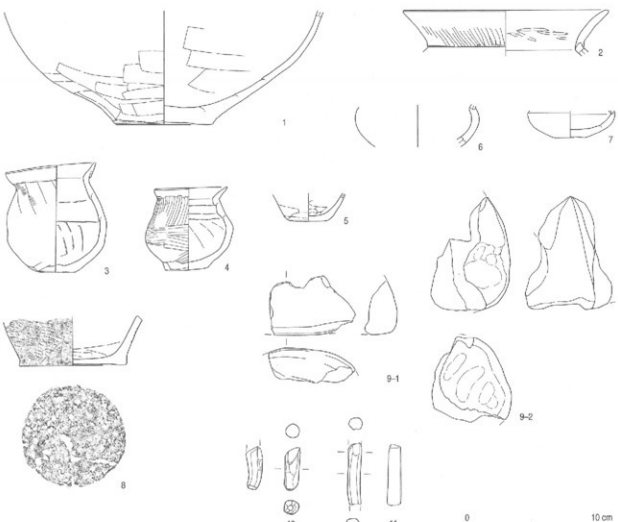


第28図　10号住居跡・出土遺物

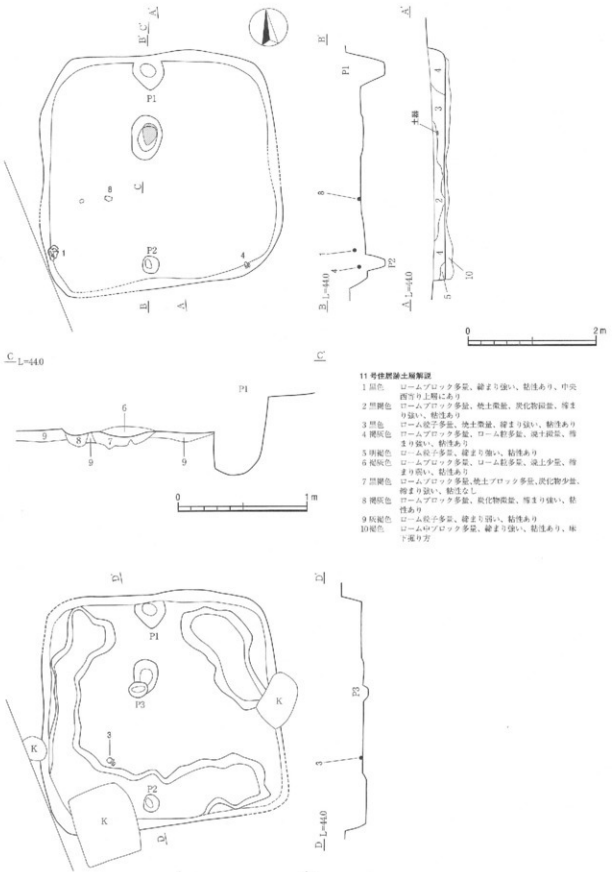
11号住居跡（第29・30図）

位置　調査区の北部Ｄ４グリッドにある。　**規模と平面形**　3.63×3.64。隅丸方形。　**主軸方向**　Ｎ－5°－Ｅ　**壁**　壁高は約24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　住居跡床下には、西壁から南壁際にやや下がる掘り方を持つ。　**ピット**　２箇所。　**炉**　長径70cm、短径47cmの長楕円形で深さ6cm。　**覆土**　覆土は２層で、壁際１層、上層の狭い範囲１層である。　**遺物**　覆上から古墳時代前期前半代の土師器と炉で使用したと思われる土製支脚、不明棒状土製品が出土している。３のミニチュア土器は床下から出土している。

所見　古墳時代前期前半代の小型の住居跡である。



第29図　11号住居跡出土遺物



11号住居跡土層解説

1	暗色	ロームブロック多量、礫まり強い、粘性あり、中央部万上層にあり
2	黒褐色	ロームブロック多量、焼土微量、炭化物微量、堆まり強い、粘性あり
3	黒色	ローム粒子多量、焼土微量、礫まり強い、粘性あり
4	褐灰色	ロームブロック多量、ローム粒多量、焼土微量、堆まり強い、粘性あり
5	暗褐色	ローム粒子多量、礫まり強い、粘性あり
6	褐灰色	ロームブロック多量、ローム粒多量、焼土少量、堆まり弱い、粘性あり
7	黒褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック多量、炭化物少量、堆まり強い、粘性なし
8	褐灰色	ロームブロック多量、炭化物微量、堆まり強い、粘性あり
9	灰褐色	ローム粒子多量、礫まり弱い、粘性あり
10	暗色	ロームロブロック多量、礫まり強い、粘性あり、床下張り方

第30図　11号住居跡・掘り方

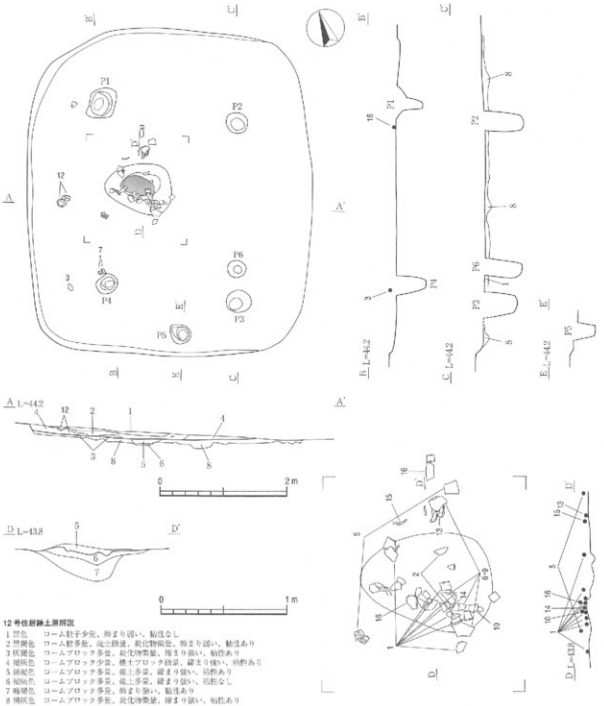
表11　11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	– – 7.5	球胴形で、胴部外面はヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデ。	石英、角閃石、砂礫、白色粒	良好	橙色	
2	土師器 甕	(7.5) – –	くの字口縁。口縁部外面ヨコナデ後ミガキ、内面ヨコナデ。	石英、角閃石、長石、白色粒	良好	橙色	
3	土師器 壺	– – 2.2	複合口縁。胴部外面下位ヘラケズリ、上～中位ナデ、内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	石英、角閃石、長石	良好	橙色	
4	土師器 ミニチュア土器	5.6 6.7 3.4	口縁部ヨコナデ。胴部上位ハケメ、下位ナデ。	白色粒、赤色粒	良好	橙色	
5	土師器 ミニチュア土器	– – 3.1	鉢形か。内外面ヘラナデ。	石英、長石	良好	橙色	
6	土師器 壺	– – –	胴部片。内外面ナデ	石英、白色粒	良好	橙色	
7	土師器 埋	– – 2.2	体部片。外面ナデ、内面ヨコナデ。	石英、角閃石、チャート、長石	良好	橙色	
8	弥生土器 壺	– – 8.3	底部布目痕。胴部軸縄不明な付加条縄文でLの2巻きの縄を付加する。	石英、長石、チャート	良好	橙色	
9	土製品 支脚	– –	部分破片で、曲がった三角錐状に復元されるものと思われる。	角閃石、石英、白色粒、赤色粒	良好	明褐色	
10	土製品 棒状製品	径1.2	体部ヘラケズリ。	角閃石、石英、白色粒	良好	にぶい橙色	
11	土製品 棒状製品	径1.1	体部ヘラケズリ。	角閃石、石英、白色粒	良好	にぶい褐色	

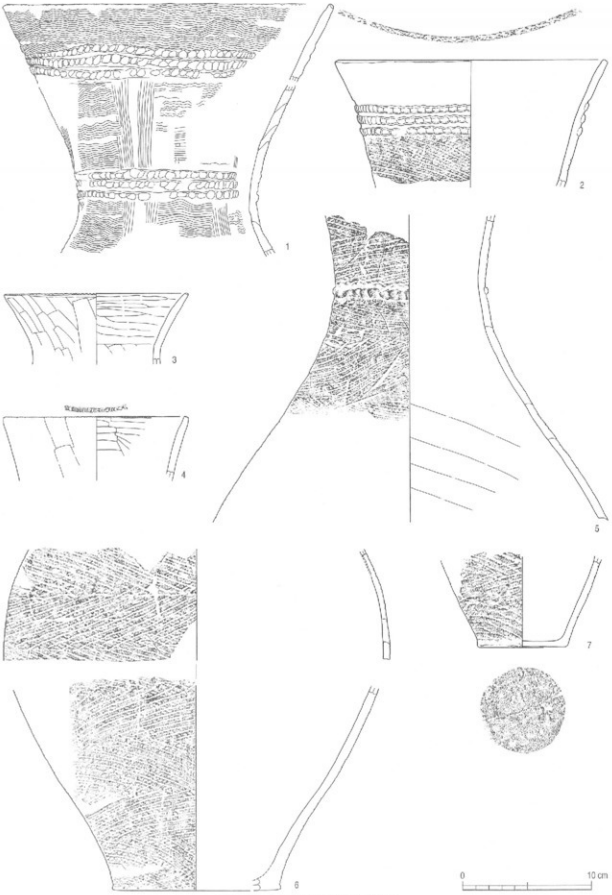
12号住居跡（第31～33図）

位置　調査区の北部C４グリッドにある。　**規模と平面形**　5.13×4.30 m。隅丸長方形。　**主軸方向**　N－21°―E　**壁**　壁高は５～10cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　―　**ピット**　６箇所。P１～４は主柱穴、P5は出入り口ピット。　**炉**　長径104cm、短径69cmの長楕円形で深さ６cm。　**覆土**　覆土は４層である。

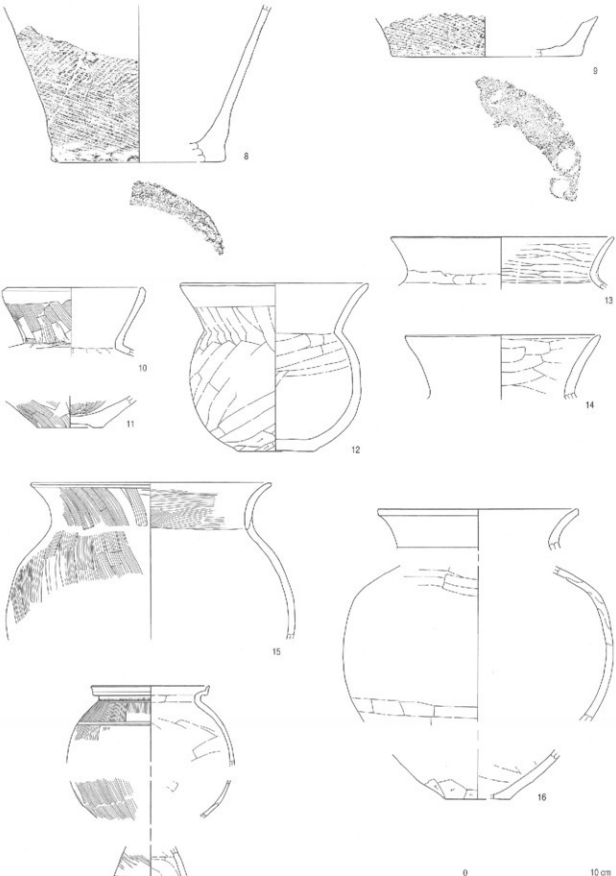
遺物　炉の周辺部から西側の覆土下層にかけて土王台式土器、土師器、弥生器形で外面は縦方向に内面は横方向に丁寧なヘラナデを施した無文土器（3、4）、土師器の甕器形で口縁部内面に丁寧な横方向のヘラナデ調整を施した土器（13、14）、小型のＳ字口縁台付き甕（17）等が出土している。　**所見**　住居跡は縦長隅丸方形の弥生の住居形態だが、出土遺物から見て弥生の最終段階の住居の廃絶後、埋没過程の中で、弥生から土師器への移行期の土器や古墳時代前期の土器が廃棄・混入していったものと見られる。


A L=44.2
A'
B L=44.2
C L=44.2
D L=43.8
D'
E L=44.2
0 2m
0 1m
12号住居跡土層断面
1 黒色　ローム粒子少量、締まり弱い、粘性なし
2 黒褐色　ローム粒多量、炭土微量、炭化物微量、締まり弱い、粘性あり
3 灰褐色　ローム粒多量、炭化物微量、締まり強い、粘性あり
4 暗灰色　ローム粒少量、焼土ブロック微量、硬さ強い、粘性あり
5 黒褐色　ローム粒多量、炭土多量、締まり強い、粘性あり
6 灰褐色　ローム粒多量、炭土多量、締まり強い、粘性なし
7 暗褐色　ローム粒多量、締まり強い、粘性あり
8 暗灰色　ローム粒多量、炭化物微量、締まり強い、粘性あり

第31図　12号住居跡



第 32 図　12 号住居跡出土遺物 1



第33図　12号住居跡出土遺物2

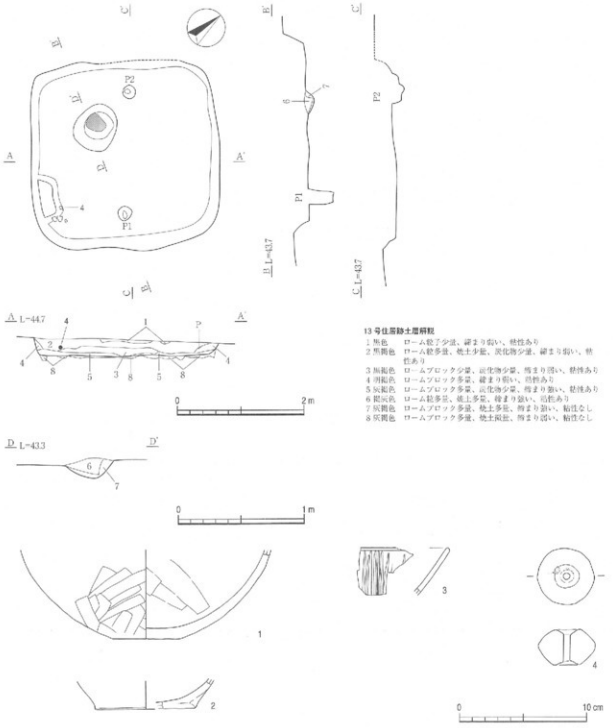
表12　12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 大型壺	(25.2) － －	口頸部縄原体によるキザミ。口縁部上から７本１単位の櫛歯状工具による波状文。低い隆帯３段、縦区画間の巾がやや広い５単位の縦区画と区画内波状文の充填。隆帯３段、区画間の巾が狭い縦区画７単位。	金雲母、石英、白色粒	良好	にぶい黄褐色	
2	弥生土器 壺	－ － －	口縁部片。口縁部無文、隆帯３段、付加条２種縄文で、Lの乙巻きの縄を付加する。	金雲母、石英、白色粒	良好	浅黄色	
3	弥生土器 小型壺	(14.4) － －	口唇部ヘラキザミ。口縁部外面縦位ヘラケズリ、内面横位ヘラナデ。	長石・石英を含む	良好	にぶい黄色	
4	弥生土器 壺	(14.4) － －	口唇部ヘラキザミ。口縁部外面縦位ヘラナデ、内面横位ヘラミガキ。	石英の含有多い微砂粒	良好	黒褐色	
5	弥生土器 壺	－ － －	胴部付加条２種縄文、LのZ巻きとRのS巻きを付加した原体で羽状構成をとる。	金雲母、石英、角閃石、白色粒	良好	にぶい黄橙色	
6	弥生土器 壺	－ － (13.1)	底部砂目。胴部付加条２種縄文、LのZ巻きとRのS巻きを付加した原体で羽状構成をとる。	金雲母、石英、白色粒	良好	にぶい橙色	
7	弥生土器 小型壺	－ － 7.0	底部布目。胴部軸縄不明の付加条縄文で、LのZ巻きとRのS巻きの羽状構成。	微砂粒	良好	にぶい黄褐色	
8	弥生土器 壺	－ － (13.6)	底部布目。胴部付加条１種縄文で、LのZ巻きとRのS巻きの羽状構成。	石英、長石	良好	明褐色	
9	弥生土器 壺	－ － (14.7)	底部片。付加条１種縄文。	金雲母、角閃石、石英	良好	にぶい黄橙色	
10	土師器 壺	(10.6) － －	口縁部片。口縁部外面ハケメ。	石英、海綿骨針	良好	褐色	
11	土師器 甕	－ － 5.0	底部輪台状。胴部内外面ハケメ。	海綿骨針	良好	黄褐色	
12	土師器 小型甕	14.6 14.2 6.2	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラナデ、胴部下端ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部周縁ヘラケズリ、中央部ナデ。	石英、海綿骨針	良好	明赤褐色	
13	弥生土器 壺	(17.4) － －	「く」の字口縁。口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。	海綿骨針	良好	黒褐色	
14	土師器 甕	(15.2) － －	口縁部内外面ヘラナデ。	石英、長石、角閃石	良好	黒色	
15	弥生土器 壺	(19.0) － －	口縁部内外面ハケメ。胴部外面ハケメ、内面ナデ。	石英、赤褐色粒	良好	褐色	
16	土師器 壺	(18.6) － (5.0)	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、胴部下端ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ナデ。	チャート、海綿骨針	良好	明赤褐色	
17	土師器 台付甕	(9.2) － 6.4	小型のS字口縁台付甕で、胴部外面目の細かなハケメ、上位横位ハケ。脚台部上位荒いハケメ、下位ヘラナデ。	金雲母	良好	にぶい黄	

13号住居跡（第34図）

位置　調査区の北東部D５グリッドにある。　**規模と平面形**　2.91ｍ×2.95ｍ、隅丸方形。　**主軸方向**　N―49°―W　**壁**　壁高は20～25cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　―　**ピット**　２箇所。Ｐ１は深さ38cm、Ｐ２は深さ18cm。　**炉**　長径74cm、短径54cmの長楕円形。深さ6cm。　**覆土**　覆土は４層で、主体層が３層、

壁際堆積層が1層である。 **遺物** 覆土から土師器片と算盤玉形紡錘車が出土している。 **所見** 古墳時代前期の小型住居跡である。



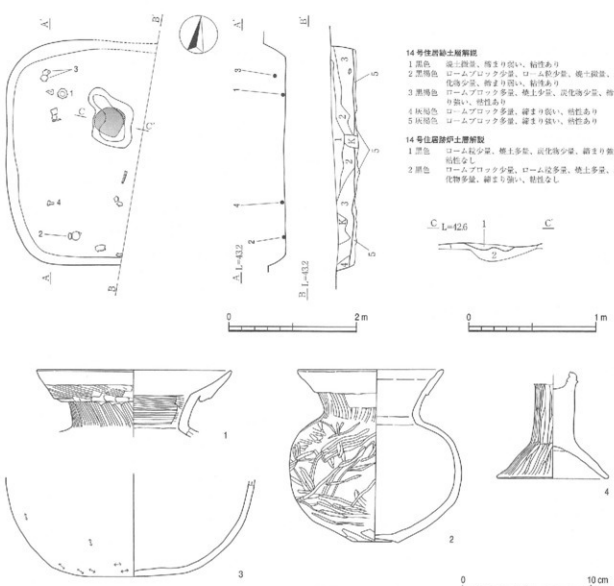
第34図 13号住居跡・出土遺物

表13　13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	－ － (5.0)	胴部片。胴部中位ナデ、下位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい黄褐色	
2	弥生土器 壺	－ － (8.0)	内外面ナデ。底部ヘラナデ。	長石	良好	灰黄褐色	
3	土師器 高坏	－ － －	坏部片。外面ミガキ。	長石	良好	赤褐色	
4	土製品 土玉		径4.4、厚2.8、孔径0.45、重50g。	滑緑骨針	良好	淡黄色	

14号住居跡（第35図）

位置　調査区の東部Ｅ５グリッドにある。　**規模と平面形**　3.53ｍ×―　**主軸方向**　Ｎ－13°―Ｗ　**壁**　壁



第35図　14号住居跡・出土遺物

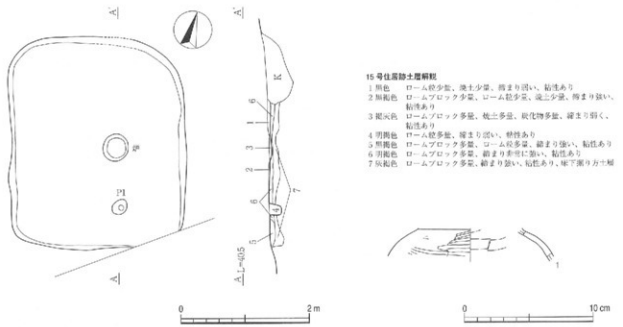
高は20～34cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 撹乱土坑に床面と北側壁の一部を壊されている。 **ピット** — **炉** 長径70cm、短径55cmの長楕円形で深さ4cm。 **覆土** 覆土は4層で、主体層が3層、壁際堆積層が1層である。上層は自然堆積層である。 **遺物** 覆土下層から土師器の壺や高坏が破片で出土している。 **所見** 古墳時代前期の小型住居跡である。

表14 14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺	15.2 — —	有段口縁の壺で、口縁部下半と頸部、頸部内面にハケメ。	石英、長石	良好	橙色	
2	土師器 壺	10.3 4.0 13.6	複合口縁の小型壺で、頸部にハケメ、胴部はミガキ。	石英	良好	にぶい黄橙色	
3	土師器 鉢	— — 9.0	外面赤彩。丁寧なミガキ。	石英	良好	赤褐色	
4	土師器 高坏	— — 8.6	脚部は中実柱状で、外面ミガキ。	長石、石英	良好	浅黄橙色	

15号住居跡（第36図）

位置 調査区の南部J5グリッドにある。 **規模と平面形** 3.36 m × 2.73 m、隅丸長方形。 **主軸方向** N－13°－W **壁** 壁高は約15cm、ほぼ垂直に立ち上がる。 **床** 撮り方を持っている。 **ピット** 1箇所。P1は住居跡に伴うピットである。 **炉** 長径44cm、短径40cmの楕円形。火床面の焼土化が弱い。 **覆土** 覆土は薄い。 **遺物** 覆土から土師器小型壺の肩部片が出土している。 **所見** 出土遺物と遺構の形態から古墳時代前期の小型住居跡であると思われる。P1は配置から出入り口ピットになるものと思われる。



第36図 15号住居跡・出土遺物

表15　15号住居跡出土遺物観察表

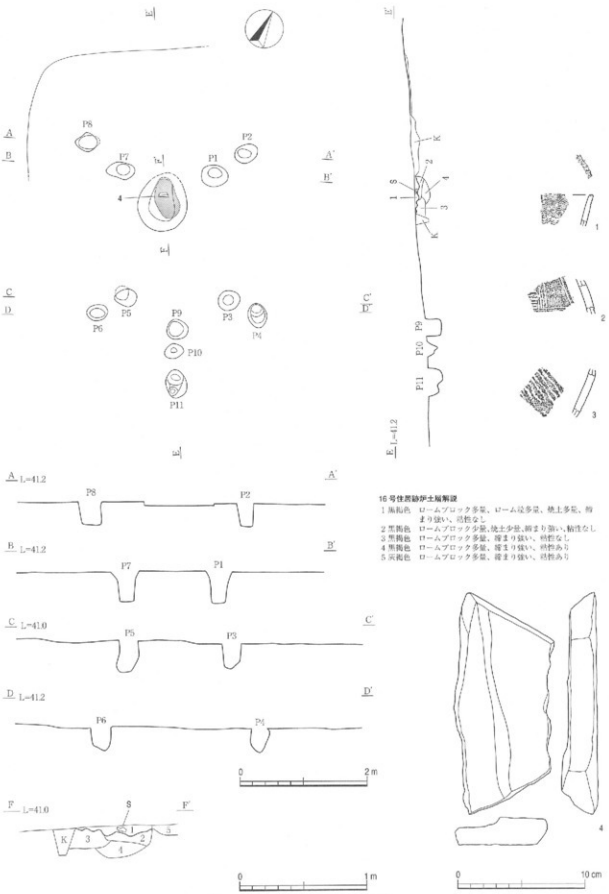
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 増	－ － －	胴部外面ミガキ。内面ヘラナデ。	石英、角閃石、白色粒	良好	にぶい黄橙色	

16号住居跡（第37図）

位置　調査区の南部Ｉ６グリッドにある。　**規模と平面形**　―　**主軸方向**　Ｎ－30°―Ｗ　**壁**　残存していない。　**床**　―　**ピット**　11箇所。Ｐ２・４・６・８の主柱穴とP11の出入り口ピットが組み合い、P1・3・5・7の主柱穴とP10かP9の出入り口ピットが組み合う配置である。　**炉**　長径96cm、短径78cmの楕円形で深さ6cm。　**覆土**　残存していない。　**遺物**　覆土から十王台期の弥生土器が出土している。　**所見**　ピットと炉が残存するだけの住居跡であるがそれらの配置から、弥生時代後期後半の時期の竪穴住居跡と考えられる。

表16　16号住居跡出土遺物観察表

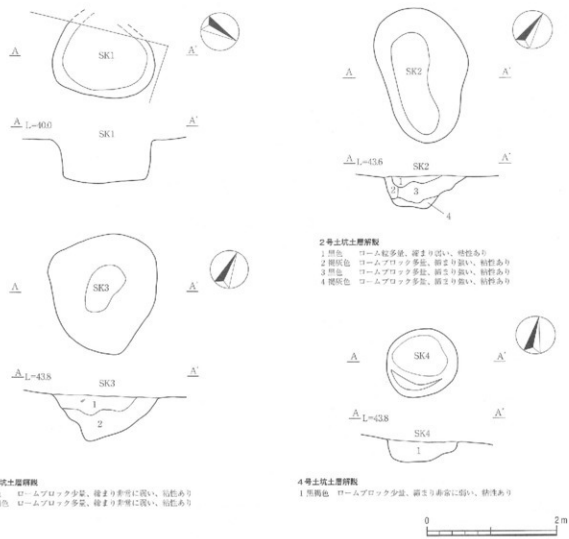
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 壺	－ － －	口縁部片。４本１単位の櫛歯状工具による波状文が３段残る。	石英、白色粒	良好	にぶい黄橙色	
2	弥生土器 壺	－ － －	４本１単位の櫛歯状工具による区画、区画内波状文を充填。	石英、角閃石、白色粒	良好	にぶい黄橙色	
3	弥生土器 壺	－ －	軸縄不明の付加条縄文でＬのＺ巻きの原体を使用。	白色粒	良好	にぶい黄橙色	
4	炉石	－ － －	長17.5、幅7.3、厚さ2.8、重459ｇ、片岩。				



第 37 図　16 号住居跡・出土遺物

第2節　土坑その他

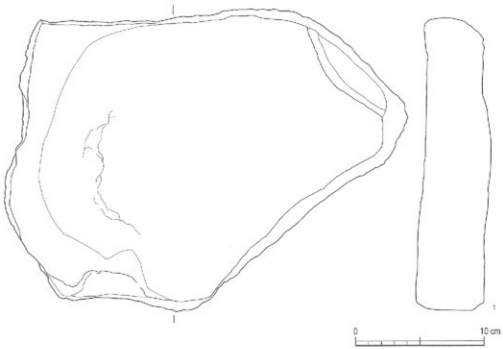
調査区内から18基の土坑が確認されている。出土遺物から時期の明瞭なものは少なく、わずかにみられる陶磁器片や覆土の観察から、近世以降の耕作に伴う撹乱土坑が主体と思われる。表18に概要をまとめている。その他に井戸跡と見られる大型の穴がD５グリッド内から、陥し穴と見られる穴がH４グリッドから１基ずつ確認されている。



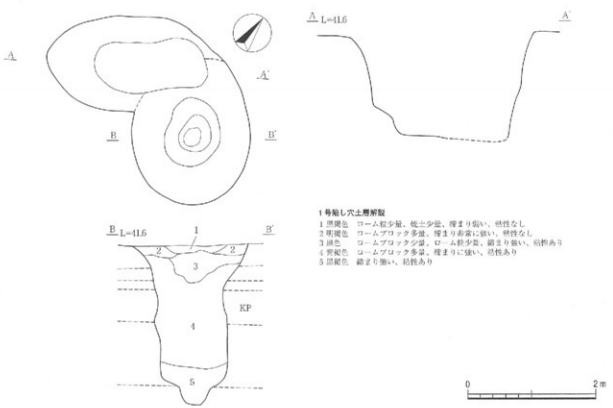
第38図　1～4号土坑

表17　6号土坑出土遺物観察表

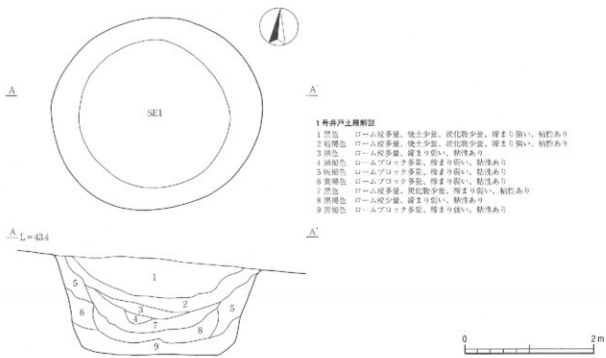
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	台石		長30.0、幅23.5、厚5.4、重7820ｇ、花崗岩				



第39図　6号土坑出土遺物



第40図　1号陥し穴



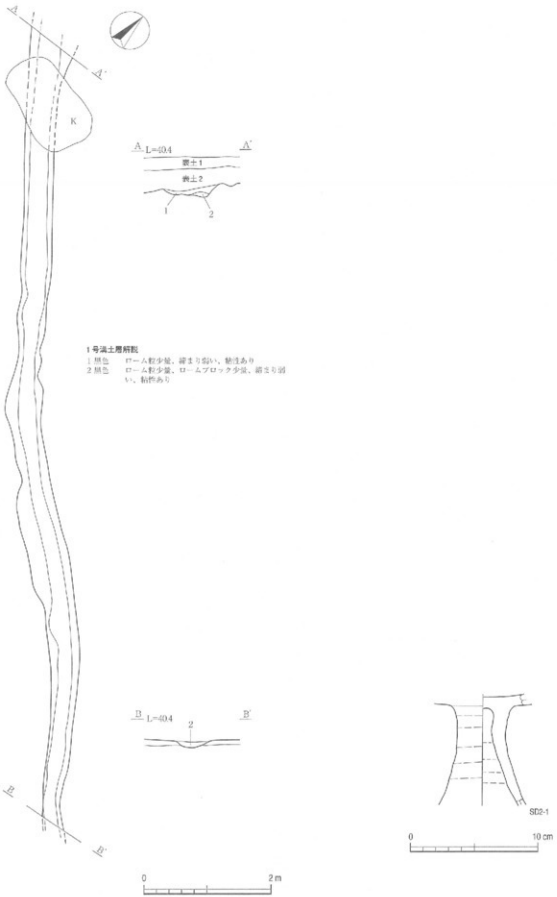
第41図　1号井戸

表18　土坑一覧表

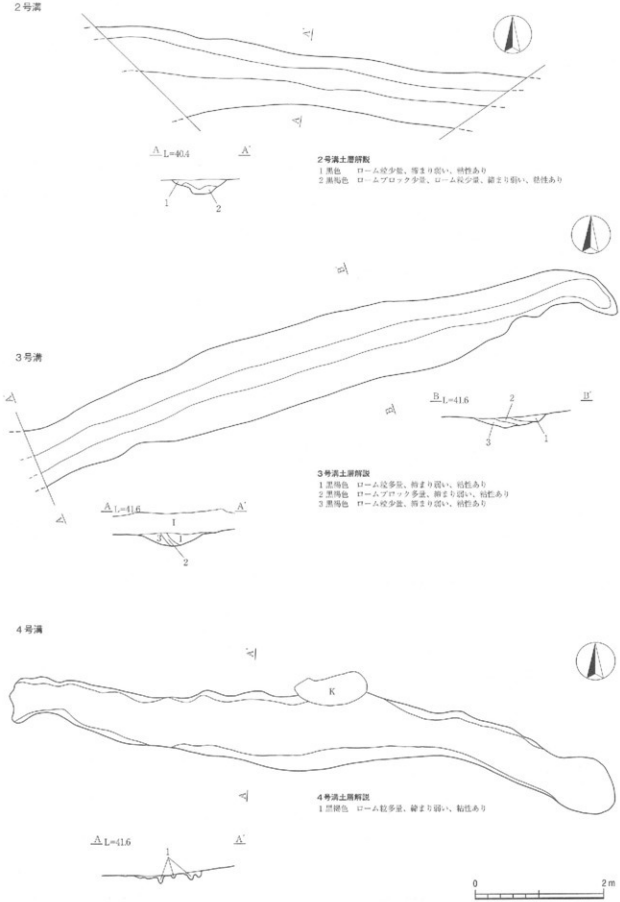
番　号	位　置	形	態(長径×短径×深さm)		備　考
1号土坑	J 2	1.06	－	0.46	
2号土坑	E 4	1.46	0.94	0.34	
3号土坑	D 5	1.32	1.26	0.50	覆土から塼管片が出土
4号土坑	C 5	0.82	0.78	0.22	
5号土坑	J 4～I 4	1.76	1.28	0.47	
6号土坑	J 4	1.50	1.10	0.14	覆土から台石が出土
7号土坑	J 4	1.04	0.96	0.45	
8号土坑	J 4	0.86	0.82	0.38	
9号土坑	J 4～J 5	1.00	0.90	0.29	
10号土坑	I 3、I 4、J 3、J 4	1.10	1.06	0.18	
11号土坑	J 4	1.30	0.70	0.07	
12号土坑	J 4	1.56	1.44	0.18	
13号土坑	J 4	1.18	1.28	0.08	
14号土坑	K 4	0.88	0.88	0.25	
15号土坑	J 5	1.08	－	0.11	
16号土坑	I 5	0.98	－	0.19	
17号土坑	I 5	0.80	－	0.04	
18号土坑	I 4	1.22	1.14	0.19	

第3節　溝

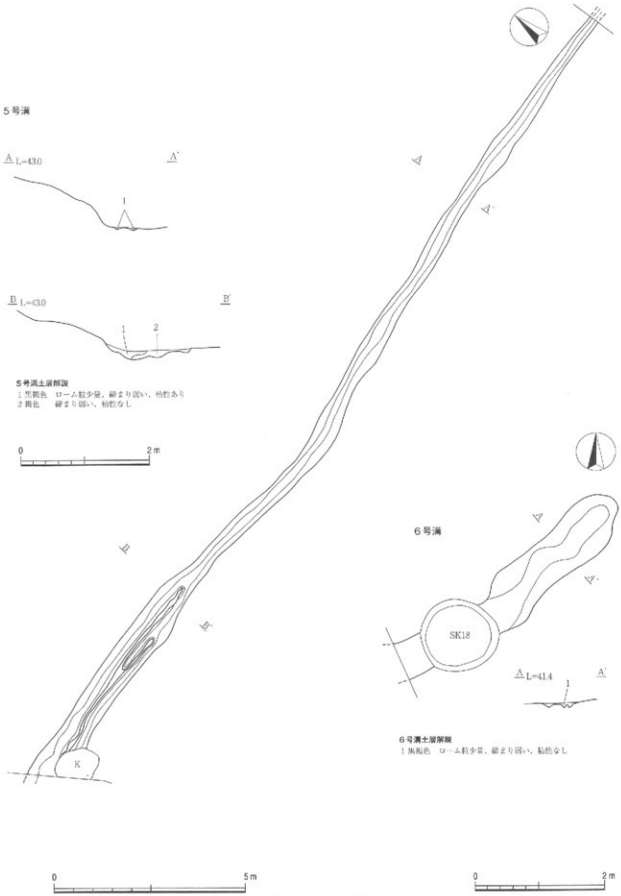
調査区内から6条の溝が確認されている。2号溝から奈良時代頃の須恵器高坏が出土しているが、その他の溝は土坑と同様に近世以降の時期の耕作に伴う、地割り溝等の可能性が考えられる。



第42図　1号溝・2号溝出土遺物


2号溝
A L=40.4
A'
1
2
2号溝土層解説
1 黒色　ローム粒少量、薄まり弱い、粘性あり
2 黒褐色　ロームブロック少量、ローム粒少量、締まり弱い、粘性あり
3号溝
B L=41.6
B'
2
3
1
3号溝土層解説
1 黒褐色　ローム粒多量、薄まり弱い、粘性あり
2 黒褐色　ロームブロック多量、薄まり弱い、粘性あり
3 黒褐色　ローム粒少量、薄まり弱い、粘性あり
A L=41.6
A'
1
2
4号溝
K
4号溝土層解説
1 黒褐色　ローム粒多量、締まり弱い、粘性あり
A L=41.6
A'
1
0
2m

第43図　2・3・4号溝


5号溝
A L=43.0
A'
1
B L=43.0
B'
1
2
5号溝土層解説
1 黒褐色　ローム粒少量、締まり強い、粘性あり
2 褐色　締まり弱い、粘性なし
0
2m
A
A'
B
B'
K
6号溝
SK18
A L=41.4
A'
1
6号溝土層解説
1 黒褐色　ローム粒少量、締まり弱い、粘性なし
0
5m
0
2m

第44図　5・6号溝

表19　2号溝跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 高坏	－ － －	脚部片。透かし孔なし。	長石、石英	良好	灰オリーブ	

第4節　ピット

調査区内から53基のピットが確認されている。出土遺物がなく、配置関係から竪穴住居跡や掘立柱列になると思われるものはなく、時期・性格が不明なものがほとんどで、全体図にその配置を示し、表21に一覧表を示した。

第45図　47号ピット出土遺物

表20　47号ピット出土遺物観察表

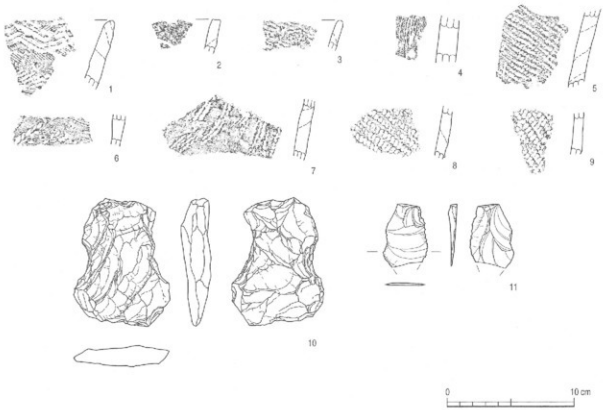
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	陶器 常滑	－ － －	内面ヘラナデ。	長石、石英、赤褐色粒	良好	暗紫灰色	

第5節　谷部包含層その他

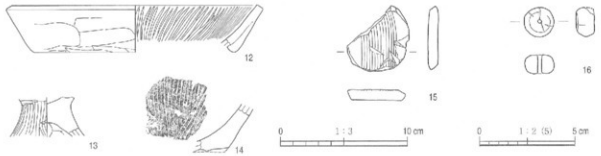
調査地区の北端の埋没谷の斜面部包含層からは、弥生土器と縄文土器が出土している。埋没谷3層からは弥生後期の土器細片が、4層からは縄文時代前期の黒浜式土器が出土している。土層の堆積状況は基本土層のB地点の土層図と写真図版PL2を参照願いたい。埋没谷4層出土縄文土器は遺構外遺物の中の第46図-1に掲載している。その他遺構外出土の縄文土器は、第46図－2・3・6・7が黒浜式期で、その内6・7は大木Ⅱa式、8・9は粟島台式土器、4・5は中期後半から後期の初め頃の土器である。その他遺構外出土の古墳時代～近世の遺物は、第47図と表22を参照願いたい。

表21　ピット一覧表

番　号	位　置	規　模(長径×短径×深さ)			備　考
1号ピット	J 2	0.3	0.28	0.19	
2号ピット	J 2	0.42	0.4	0.26	
3号ピット	J 2	0.32	0.3	0.21	
4号ピット	J 3	0.24	0.2	0.26	
5号ピット	J 3	0.34	0.28	0.21	
6号ピット	J 3	0.26	0.24	0.27	
7号ピット	J 3	0.42	0.28	0.26	
8号ピット	J 3	0.26	0.22	0.12	
9号ピット	J 3	0.28	0.26	0.18	
10号ピット	J 3	0.2	0.18	0.28	
11号ピット	J 3	0.28	0.24	0.17	
12号ピット	J 3	0.32	0.26	0.14	
13号ピット	J 3	0.32	0.3	0.19	
14号ピット	J 3	0.24	0.24	0.3	
15号ピット	J 3	0.4	0.3	0.5	
16号ピット	J 3	0.46	0.26	0.53	
17号ピット	I 5	0.6	0.58	0.21	
18号ピット	I 4	0.44	0.42	0.19	
19号ピット	D 5	0.82	0.54	0.38	
20号ピット	D 5	0.42	0.28	0.74	
21号ピット	C 4、C 5	0.5	0.42	0.51	
22号ピット	C 5	0.38	0.28	0.37	
23号ピット	C 5	0.34	0.3	0.61	
24号ピット	C 5	0.72	0.34	0.65	
25号ピット	J 3	0.58	0.46	0.38	
26号ピット	J 3	0.4	0.38	0.22	
27号ピット	J 3	0.42	0.28	0.35	
28号ピット	J 3	0.24	0.22	0.17	
29号ピット	J 3	0.34	0.3	0.18	
30号ピット	J 3	0.3	0.28	0.17	
31号ピット	J 3	0.18	0.18	0.12	
32号ピット	J 3	0.24	0.22	0.28	
33号ピット	J 3	0.3	0.28	0.15	
34号ピット	J 3	0.24	0.22	0.31	
35号ピット	J 3	0.26	0.24	0.17	
36号ピット	J 3	0.34	0.3	0.17	
37号ピット	J 3	0.22	0.22	0.18	
38号ピット	J 3	0.26	0.24	0.14	
39号ピット	J 3	0.26	0.24	0.42	
40号ピット	I 3	0.58	0.46	0.38	
41号ピット	I 4	0.26	0.26	0.13	
42号ピット	J 4	0.2	0.2	0.18	
43号ピット	J 4	0.32	0.26	0.38	
44号ピット	J 3	0.26	0.26	0.14	
45号ピット	J 3	0.24	0.2	0.11	
46号ピット	J 3	0.26	0.2	0.17	
47号ピット	J 3	0.22	0.22	0.18	常滑片出土
48号ピット	J 3	0.3	0.28	0.18	
49号ピット	J 3	0.24	0.24	0.1	
50号ピット	J 4	0.6	0.54	0.82	
51号ピット	J 4	0.62	0.28	0.86	
52号ピット	J 4	0.48	0.48	0.35	
53号ピット	J 5	0.32	0.32	0.34	



第46図　遺構外出土遺物（縄文時代）



第47図　遺構外出土遺物（古墳時代～近世）

表22　遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	– – –	細い撚糸文と太い無節Lの縄を横回転させた縄文を地文とし、口縁部に竹状工具による山形連点状刺突文を施す。	繊維多量	良好	にぶい黄褐色	谷部包含層層
2	縄文土器 深鉢	– – –	LR縄部小片。地文は無節の太い縄か。	微細多量、白色粒子	良好	暗褐色	SI13覆土
3	縄文土器 深鉢	– – –	胴部片。無節Lの太い縄を施す。	繊維	良好	橙色	D区表採
4	縄文土器 深鉢	– – –	櫛歯状工具による条線文。	石英・金雲母	良好	にぶい黄褐色	SD02
5	縄文土器 深鉢	– – –	胴部片。3段のLRLを縦方向に施す。	白色粒、赤褐色粒、雲母	良好	橙色	SI11覆土
6	縄文土器 深鉢	– – –	胴部片。撚糸2本か3本を束ねて巻き付けた工具で施文。	繊維、赤褐色粒	良好	橙色	SI10覆土
7	縄文土器 深鉢	– – –	底部片。撚糸2本か3本を束ねて巻き付けた工具で施文。	石英、長石、緑岸	良好	にぶい黄褐色	C区表採
8	縄文土器 深鉢	– – –	胴部片。単節RL斜縄文。	石英、長石、白色岩	良好	明赤褐色	SW01
9	縄文土器 深鉢	– – –	胴部片。単節RL斜縄文。	長石、石英	良好	橙色	SW01
10	石器 打製石斧		長10.0、幅7.6、厚2.0、重175g、安山岩				
11	剥片		長3.3、幅2.2、厚0.4、重2.35g、頁岩				
12	土師器 壺	– – –	内面赤彩・ミガキ。	石英、白色粒	良好	浅黄橙色	表採
13	土師器 高杯	– – –	脚部外面ミガキ・赤彩。	角閃石、白色粒	良好	橙色	表採
14	陶器 擂鉢		内面細く細かいスリ目がつく。赤物。	長石、白色粒	良好	橙色	表採
15	円盤状土製品		瓦質土器の擂鉢片を再利用した土製品。	石英、白色粒	普通	黄灰色	表採
16	土製品 土製小玉		径1.6、厚1.0、孔径0.15、重2.39g				

第Ⅴ章　総括

長峰東遺跡から出土した遺構は、縄文時代の陥し穴1基、弥生時代後期の住居跡9軒、古墳時代前期の住居跡8軒、近世以降の新しい時期と考えられる土坑約18基と溝6条、井戸1基、その他時期不明のピット約53基である。出土遺物は、縄文時代前期前半代の黒浜式土器、弥生時代後期の十王台式土器と土製品、石製品、古墳時代前期の土師器と土製品である。特に弥生時代後期の土器と古墳時代前期の土器は約20箱が出土している。

弥生時代後期の十王台式期の住居跡は、十王台式期でも後半代の時期を主体としており、1・2・4・6A・7・8・9号住居跡がそれにあたる。規模的に大・小はなく比較的均一である。7軒の住居跡の中で1・4・9号住居跡は、主柱穴の重複や床下からの古い主柱穴の発見等で、2～3度の上屋の建て替えを行っていることが判っている。1号住居跡と9号住居跡では、柱間の狭いものと広いものが重なっており、1号住居跡では狭いものから広いものへ拡張するように建て替えられている。これは、平成19年度調査の塙谷遺跡2号住居跡でも見られ、柱間の狭いものが古いことから、上屋の拡張建て直しと見られる。長峰東遺跡の弥生時代の最も新しい段階の住居跡は出土遺物から12号住居跡と見られる。4号住居跡は、古墳時代前期の時期に属する3・5号住居跡と軸線の方向と相互の位置関係が意識的で非常に関連があるものと思われる。これは弥生時代から古墳時代前期への過渡期の社会の様相を見ることのできる貴重な資料と考えられる。

古墳時代前期の住居跡は、3・5号住居跡のように4本主柱穴を持つやや大きなサイズの竪穴住居跡と11・13・14・15号住居跡のように一辺2.5m程度の小型住居跡がある。はっきりと規模に差がある住居群からなる構成である。

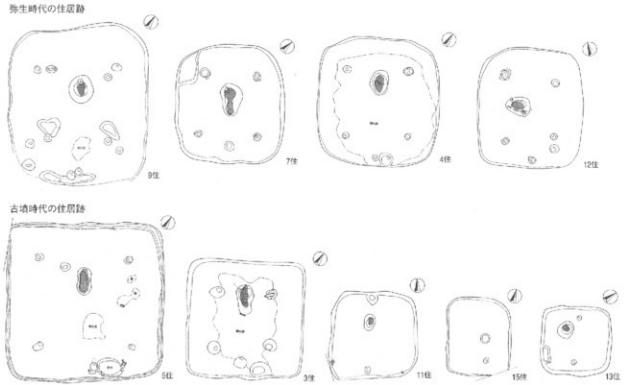
出土遺物から見ると、弥生時代の十王台式土器は、胎土の視点から、海綿骨針・長石・少量のチャートを含む在地産を主体にして、金雲母を含む久慈川周辺からの搬入品が少量、那珂川流域の胎土の製品も比較的多くある。(註1) 調整手法の違いでは、在地胎土の製品は底部が厚く、櫛歯の工具にシャープさがないなどの特徴があり、那珂川や久慈川流域の製品と胎土やつくりに違いがある。(註2) また、底部木葉痕や貼り継等、茨城県中南部域の土器の施文の特徴を持つもの、付加条1種縄文を持つ茨城県西南部～栃木県東部域の土器との関連が考えられる土器もある。施文順序に十王台式土器の一般的なルールに乗らないものがあり、他地域の土器の作り手が十王台式土器の形や施文をまねて作成していると考えられる。(註3)

十王台式土器は、前半から後半の時期にかけて長峯式土器の段階、大畑遺跡の段階、矢倉遺跡の段階へと推移する。大畑の段階は、涸沼川水系と那珂川水系の土器の区別がはっきりしない段階で、底部布目痕・木葉痕があり、縦区画文の本数が少なく、久慈川水系の土器影響か横区画には連弧文が施される段階だという。(註4) 矢倉遺跡の段階になるとほとんど底部が布目痕で、この段階のなかで口縁部が狭いものから広いものへ、縦区画の単位が2単位から3単位へ、頸部隆帯がつぶれ、頸部と胴部の境の横走文は波状化するような変化があるとされている。(註5) 長峰東遺跡の9号住居跡から7号住居跡の出土遺物の変化はこれにあたり、矢倉遺跡の古段階から新段階への変化と同じ現象であり、矢倉遺跡とほぼ同時期の遺構を主体としているようである。

12号住居跡からは、弥生土器と土師器が混在して出土しており、弥生土器の器形で無文のもの、土師器の器形で弥生土器と同じような調整を施すものが出土している。弥生土器は口縁部にきざみを持ち、器形は弥生的で内面調整に横方向のていねいなナデを加えている。この土器は、弥生時代終末期の土器と考えられる。(註6) 古墳時代前期の5号住居跡からは、古墳時代前期の土師器でも古い組成と思われる土器が出土

している。出土例が少ない特殊な器形の甕も出土している。

以上、長峰東遺跡の今回の調査成果は、十王台式土器期後半期の集落の様相、在地の土器の特徴と周辺地域の土器との関係、弥生時代終末から古墳時代前期への過渡期の様相について研究する上での貴重な資料が得られたものと考えられる。



第 48 図　長峰東遺跡の弥生時代と古墳時代の住居の比較

註 1 ～註 6　鈴木素行氏の監定結果による。各住居の代表的な土器の観察から前記の内容を指摘している。

<参考文献>

飯島一生「矢倉遺跡」『北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』茨城県教育財団文化財報告第 135 集　1998 年
鈴木素行「弥生時代遺物の編年的位置・Ⅱ」『武田Ⅶ』（財）勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告　第 9 集　1994 年
長谷川曜「大作遺跡・大畑遺跡」『北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団文化財報告第 136 集　1998 年
高野浩之「塙谷遺跡」笠間市教育委員会・㈱地域文化財コンサルタント 2008 年
鈴木素行「武田石高遺跡における十王台式土器の編年について」「武田石高遺跡」（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第 15 集　1998 年
鈴木素行「弥生時代遺物の編年的位置・Ⅲ」『武田Ⅸ』（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第 12 集　1996 年

調査区全景（北から）

調査区中央部（北から）

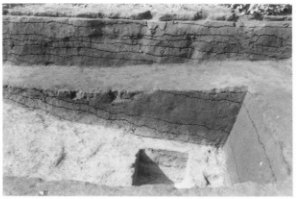
調査区南部（西から）

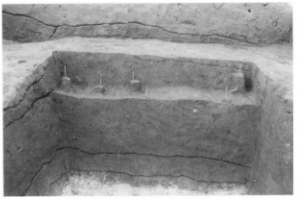
調査区南部（南西から）

調査区南部（南東から）

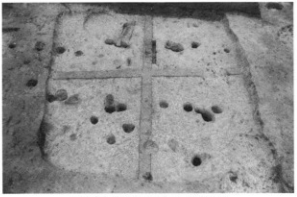
調査区北部（北から）

調査区北端部（北から）

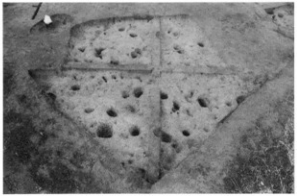

調査区北部埋没谷（東から）

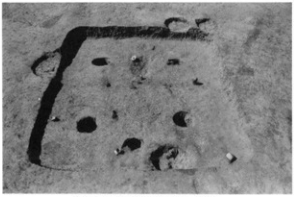

埋没谷５層遺物出土状況

１号住居跡遺物出土状況

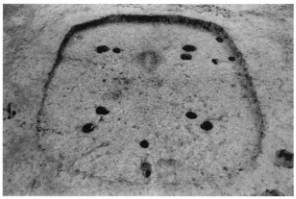

１号住居跡掘り方完掘状況

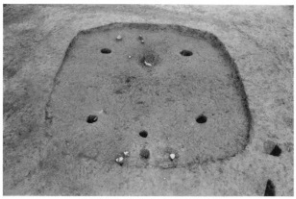
２号住居跡完掘状況

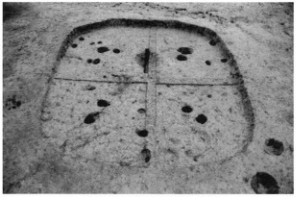

２号住居跡掘り方完掘状況


３号住居跡遺物出土状況

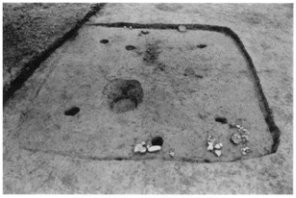
３号住居跡掘り方完掘状況

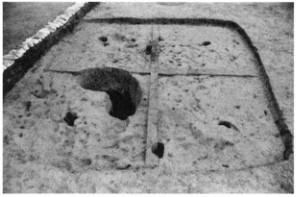

4号住居跡2面目（古段階）完掘状況

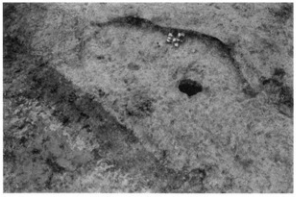

4号住居跡遺物出上状況

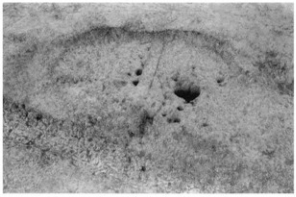

4号住居跡掘り方完掘状況

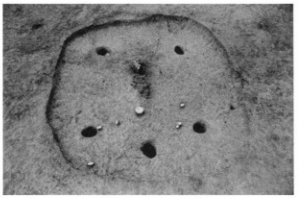
4号住居跡炉完掘状況


5号住居跡遺物出上状況

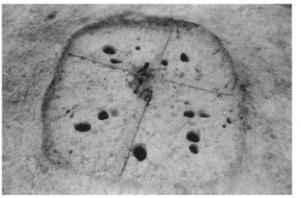

5号住居跡掘り方完掘状況


6号住居跡遺物出上状況


6号住居跡掘り方完掘状況

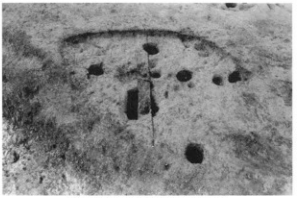


7号住居跡遺物出土状況

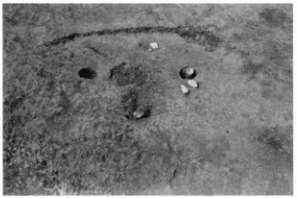


7号住居跡掘り方完掘状況

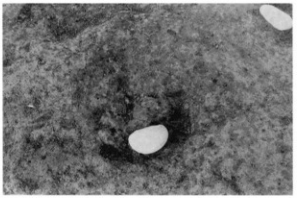
8号住居跡完掘状況



8号住居跡掘り方完掘状況

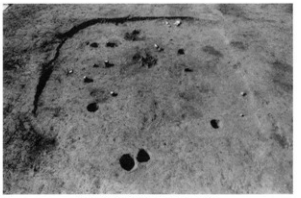


8号住居跡遺物出土状況

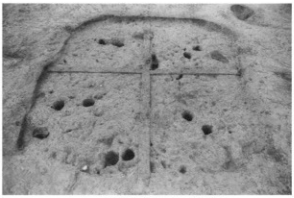


8号住居跡炉完掘状況

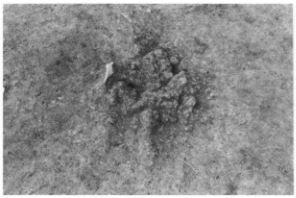
9号住居跡完掘状況



9号住居跡遺物出土状況



9 号住居跡掘り方完掘状況

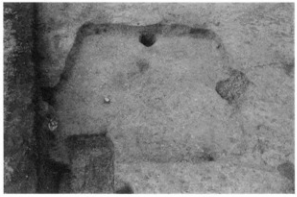


9 号住居跡炉完掘状況

9 号住居跡遺物出土状況

10 号住居跡完掘状況

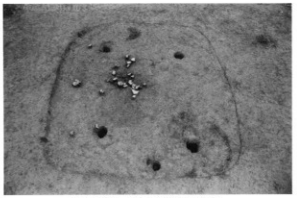
10 号住居跡掘り方完掘状況



11 号住居跡遺物出土状況

11 号住居跡掘り方完掘状況

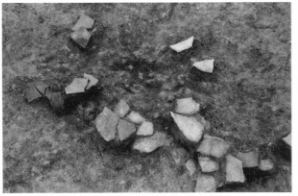
11 号住居跡床下遺物出土状況



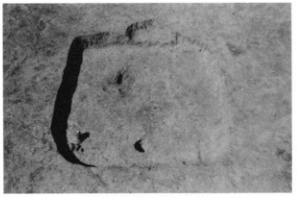
12 号住居跡遺物出土状況

12 号住居跡掘り方完掘状況

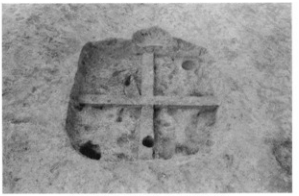
12 号住居跡遺物出土状況



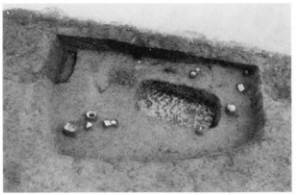
12 号住居跡遺物出土状況



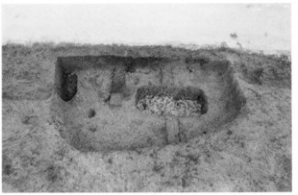
13 号住居跡完掘状況



13 号住居跡掘り方完掘状況



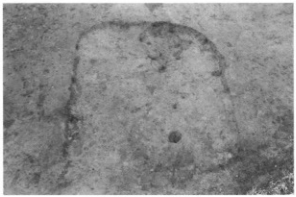
14 号住居跡遺物出土状況



14 号住居跡掘り方完掘状況

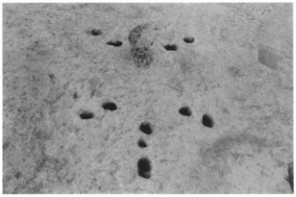
14号住居跡遺物出土状況

14号住居跡遺物出土状況

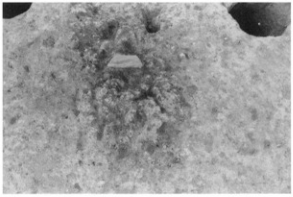


15号住居跡完掘状況

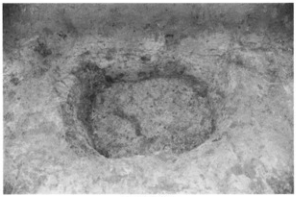
15号住居跡掘り方完掘状況



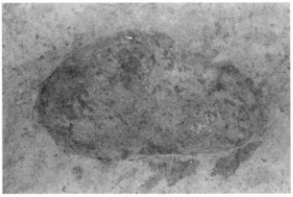
16号住居跡完掘状況



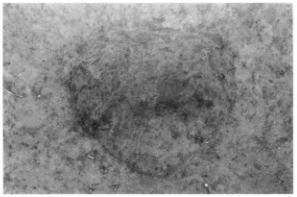
16号住居跡炉完掘状況



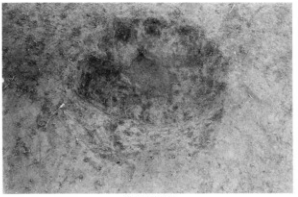
1号土坑



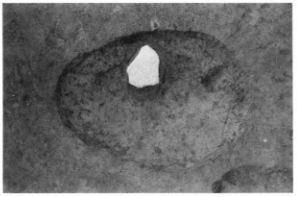
2号土坑



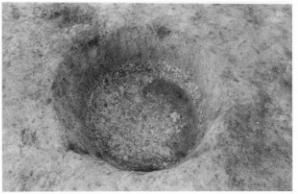
3号土坑



4号土坑



6号土坑

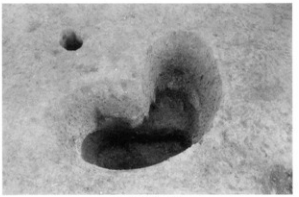


1号井戸

1号溝

4号溝

5号溝



1号陥し穴

S11-1

S11-4

S11-5

S11-17

S12-1

S12-2

S12-3

S13-9

S13-4

S13-1

S14-1

S14-5

S14-4

S14-2

S15-6

S15-8

S I 5-20

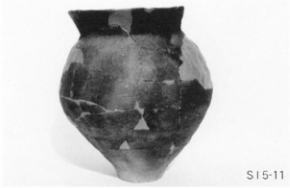
S I 5-9

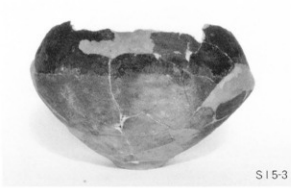
S I 5-15

S I 5-18

S I 5-13

S I 5-14


S I 5-11


S I 5-3

S15-2

S16-2

S16-1

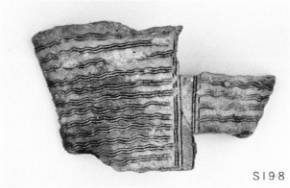
S17-4

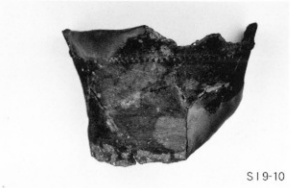
S17-5

S18-4

S19-11

S19-12


SI 9-8


SI 9-10

SI 10-6

SI 11-3

SI 11-1

SI 11-8

SI 11-4

SI 12-1

SI 12-1

SI 12-2

SI 12-6

SI 12-12

SI 14-1

SI 14-2

SI 14-3

SI 14-4

報告書抄録

ふりがな	ながみねひがしいせき
書名	長峰東遺跡
副書名	県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書
シリーズ番号	
著者名	高橋清文、土生田治
編集機関	(有) 毛野考古学研究所
所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1
発行機関	笠間市教育委員会
所在地	茨城県笠間市石井717番地
発行年月日	2010 (平成22) 年3月15日

所収遺跡	所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長峰東遺跡	笠間市小原字 長峰77番地外	08321090	36° 22′ 06″	140° 19′ 49″	20080818 ～ 20081109	1671㎡	県営畑地帯総合整備事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長峰東遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 時期不明	陥し穴1基 竪穴住居跡9軒 掘穴住居跡8軒 土坑18基 溝6条 井戸1基 ピット53基	縄文土器片 弥生土器（壺、高坏） 土師器（甕、壺、高坏）	弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡である。

要約	長峰東遺跡は、縄文時代の陥し穴と縄文時代前期の遺物包含層、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡からなる。弥生時代後期の住居跡9軒、古墳時代前期の住居跡8軒、近世以降の新しい時期と考えられる土坑約18基と溝6条、井戸1基、その他時期不明のピット53基である。出土遺物は、縄文時代前期の黒浜式土器・黒浜台式土器、弥生時代後期の十王台式土器と土製品、石製品、古墳時代前期の土師器と土製品である。

茨城県笠間市
長峰東遺跡

印刷　平成22年3月10日
発行　平成22年3月15日
編集　有限会社　毛野考古学研究所
〒379-2146　群馬県前橋市公田町1002番地1
電話　027-265-1804　FAX　027-265-5352
発行　笠間市教育委員会
〒309-1698　茨城県笠間市石井717番地
電話　0296-77-1101
有限会社　毛野考古学研究所
印刷　株式会社　ライフ
〒286-0134　千葉県成田市東和田595
電話　0476-21-1564　FAX　0476-21-2226